平 泉 文 化 研 究 年 報

第 22 号

令和４年３月

岩手大学平泉文化研究センター
岩 手 県

平泉文化研究年報　第22号　令和四年三月　岩手大学平泉文化センター　岩手県

序

岩手大学と岩手県は、「平泉文化研究機関整備推進事業」により、平泉文化研究に必要となる研究基盤の整備と拡充を図るべく、研究者相互の連携と学際的研究の推進のための共同研究に取り組んできました。

平成18年度以降、岩手大学と岩手県は連携して平泉文化研究を行い、その成果を「平泉文化フォーラム」で公表しています。また、岩手大学では平成24年度に「平泉文化研究センター」、岩手県では平成20年度に「平泉遺跡群調査事務所」を研究拠点としてそれぞれ設置しており、平成25年度には「平泉遺跡群調査事務所」内に共同研究サテライトが設置されて、連携の強化が図られてきました。

現在は、岩手県が策定した「平泉文化の総合的研究基本計画（第３期）」に基づいて、令和２年度から令和６年度までの５カ年計画で共同研究を行っています。また、「平泉遺跡群調査事務所」に代わって新設された「岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター」内に、前事務所から引き続いて共同研究サテライトが設置され、一層の連携推進が図られたところです。

『平泉文化研究年報』は、岩手県と外部研究者との共同研究の成果公表を目的として、岩手県が平成12年度から刊行してきたものですが、第３期研究計画に基づいて前号より岩手大学と岩手県の共同研究の成果を所収しています。本書が広く活用され平泉文化研究の進展に寄与することを願うとともに、共同研究にご協力いただいた関係機関、関係各位に厚く御礼申し上げます。

令和４年３月

岩手大学平泉文化研究センター
岩 手 県

目　次

研究報告

「柳之御所遺跡の考古学的研究」

柳之御所遺跡の発掘調査成果について …… 2

北村忠昭（(公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）

「東・北アジアにおける政治拠点と平泉の比較研究」

北宋の都城開封における宗教的空間 …… 10

劉　海宇（岩手大学平泉文化研究センター）

拠点づくりの考え方とその影響　―奥州藤原氏との比較― …… 18

大道篤史（岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課）

戸根貴之（岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課）

「学校教育における世界遺産の教材化」

日本の学校教育における世界遺産の教材化についての研究 …… 28

土屋直人（岩手大学教育学部）

田中成行（岩手大学教育学部）

中村　孝（岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課）

古典文学定番教材『おくのほそ道』の「平泉」の魅力を …… 36

随行記『曾良旅日記』との比較で読み取り

読者が「一人の旅人」「一人の作者」として自覚し今を表現するために

田中成行（岩手大学教育学部）

開催報告

第２回平泉学研究会・第２回平泉学フォーラム …… 50

例　言

１．本書は岩手大学と岩手県が共同で実施した研究成果をまとめたものであり、その成果については両者が等分に保有している。

２．共同研究計画は両者が協議の上策定しているが、研究活動に要する経費については岩手県が岩手大学に対して負担した上で執行している。

３．本書には、平泉文化の総合的研究基本計画（第３期）に基づいて令和３年度に実施した研究のうち、次の研究テーマについて収録した。

研究テーマ ①柳之御所遺跡の考古学的研究

④東・北アジアにおける政治的拠点と平泉の比較研究

⑤学校教育における世界遺産の教材化についての研究

なお、その他の研究テーマについては、別途刊行する『平泉学研究年報』に収録される。

４．本書の編集は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課が行った。

研究報告

柳之御所遺跡の考古学的研究
～柳之御所遺跡の発掘調査成果について～

北村忠昭

はじめに

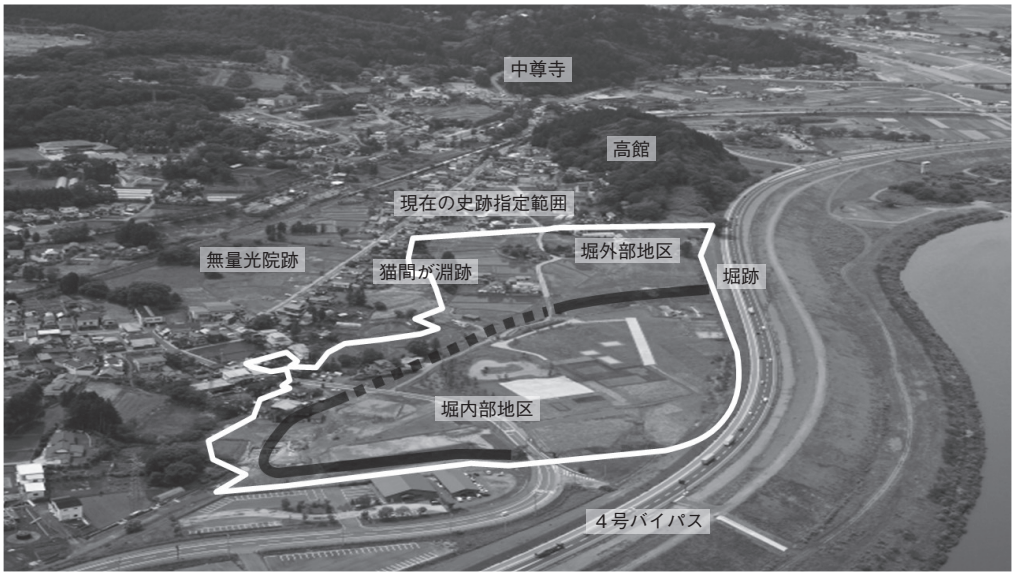
平成12年度から開始された「平泉文化研究機関整備推進事業」に基づき、第１期、第２期と平泉文化研究の推進がなされ、柳之御所遺跡に関しては、堀内部地区の内容が概ね解明されてきたと理解されている。その成果は、総括報告書の位置づけがなされている岩手県文化財調査報告書第154集『柳之御所遺跡 - 堀内部地区内容確認調査 -　図版編』及び岩手県文化財調査報告書第155集『柳之御所遺跡 - 堀内部地区内容確認調査 -　本文編』として報告されている。その一方で、堀外部地区については、整備する上での基本情報が少ないことが指摘されている。

そこで、令和２年度から「平泉文化の総合的研究基本計画」（第３期）を策定し、堀外部地区についても継続的に調査を実施していくこととしている。第２次計画の初年度である今年度は「堀内部地区に近い範囲での様相を把握」することを主な目的としている。その目的に沿うように今年度の調査範囲は堀内部地区に近い範囲を対象としている。因みに、報告書等では「道路状遺構」としているが、ここでは道路跡として話を進めていくこととする。

１　柳之御所遺跡の概略

資料１は、柳之御所遺跡とその周辺を東側上空から撮影したもので、白線で囲った範囲が現在の柳之御所遺跡の史跡指定の範囲である。柳之御所遺跡は、写真中央付近の水田が広がる部分の猫間が淵跡と呼ばれる低地部分と、遺跡の北側を流れる北上川に挟まれた部分にある。遺跡の北西には中尊寺、西側には無量光院跡、北側には隣接して高館があるという位置関係にある。

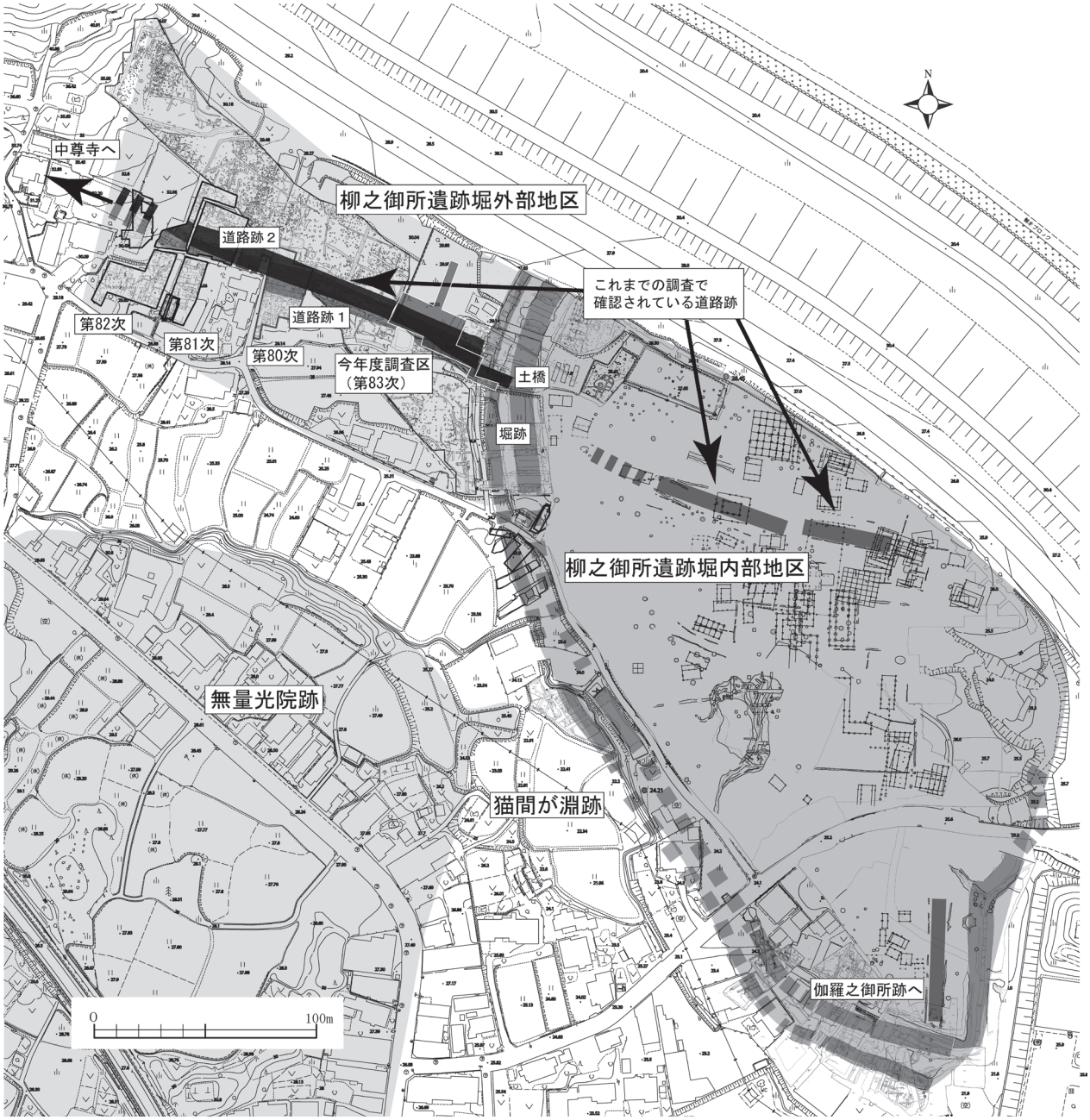
柳之御所遺跡は黒色で示した堀跡によって大きく２つに区画されている。この堀跡に囲まれた区域を「堀内部地区」、その外側を「堀外部地区」と呼んでいる。



資料１　柳之御所遺跡範囲

２　堀外部地区の調査

資料２は、柳之御所遺跡周辺の図である。柳之御所遺跡、無量光院跡、猫間が淵跡の位置関係は資料２の通りである。柳之御所遺跡を区画する堀跡の西側に堀外部地区が広がり、そのほぼ中央に中尊



資料２　調査区の位置（１）

寺方向へ延伸する２条の道路跡が確認されている。今年度の第83次調査区は白線で示した範囲であり、柳之御所遺跡を２つに区画する堀跡に隣接した堀外部地区の東端に位置する。調査区のほぼ中央に２条の道路跡が確認されている。

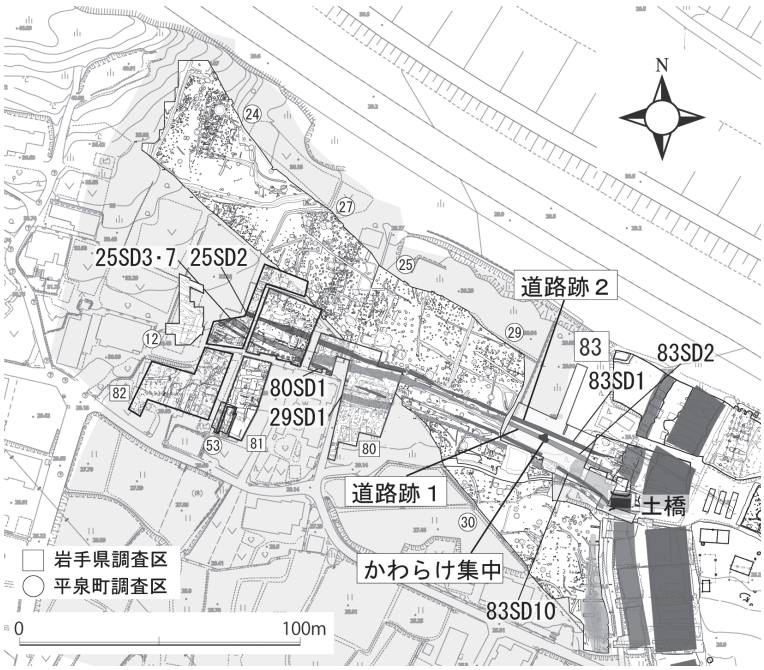
資料３は第83次調査区周辺上空から堀外部地区方向を撮影したものである。写真奥には中尊寺や高館が確認できる。堀外部地区は高館から馬の背状に延びる丘陵尾根が南東に延び、そこを境に北側は写真右側に位置する北上川へ、南側は写真左側に位置する猫間が淵跡側へ下っていく地形である。第83次調査区は白線で示した範囲である。過去の調査区は位置と次数を示した。外側の堀跡を起点に中尊寺方向へ延伸する道路跡は堀外部地区のほぼ中央に位置している。

資料３　調査区の位置（２）

（１）道路跡

資料４に堀外部地区で確認された道路跡を示した。第83次調査区は白色で示した範囲である。これまでは堀外部地区西側と外側の堀跡周辺に分かれて確認されていた道路跡は、今年度の調査によって、外側の堀跡を起点に中尊寺方向に連続して150m程延伸を確認することができた。

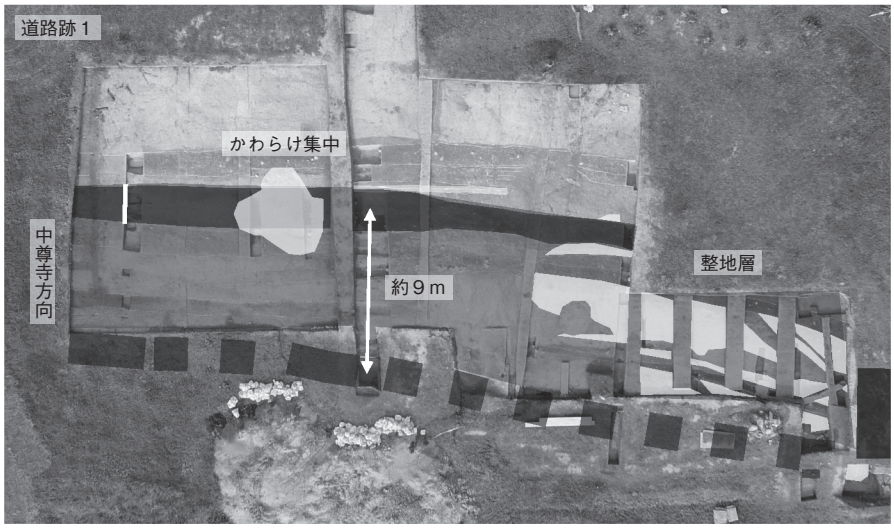
資料５は今年度の調査で確認された道路跡で、上が道路跡１、下が道路跡２である。両側溝が確認できたトレンチの位置で確認すると、道路跡１の幅は約９m、道路跡２の幅は約11mになる。どちらの道路跡も写真下側になる猫間が淵跡は近世以降の土地改変の影

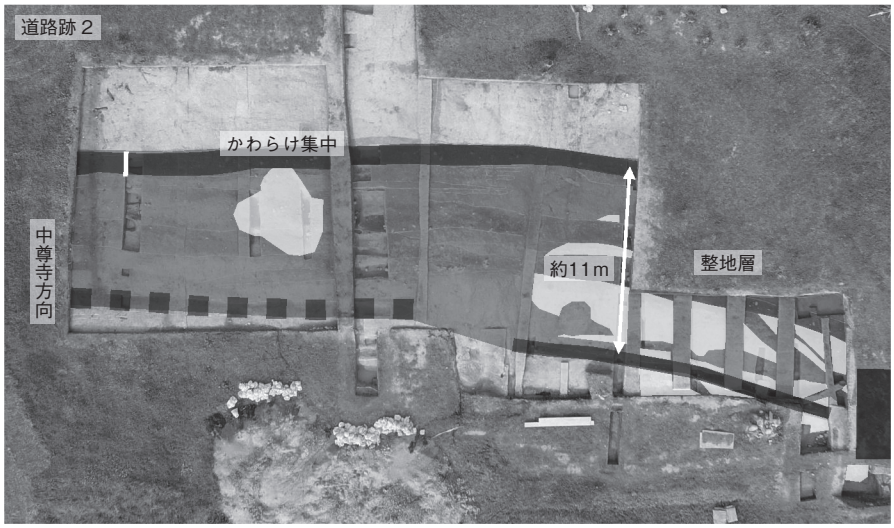


資料４　道路跡（１）

響を大きく受けており、残存状態があまり良好とは言えない。道路跡１の斜面上方に当たる北側側溝の外側には部分的ではあるが、昨年度と同じように並行する塀跡が確認された。ただし、底面に板材の痕跡は確認されていない。

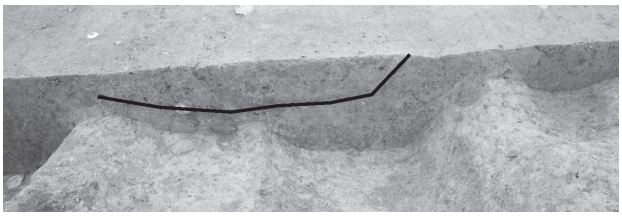
これらの道路跡の延伸方向を確認すると、道路跡１は外側の堀跡に架かる土橋へと向かうことが確認され、外側の堀跡や土橋との関連性が強いことが示唆される。一方、道路跡２は土橋よりも北側に向かって延伸している。この道路跡２が延伸すると想定される外側の堀跡周辺は整地層あるいは埋め戻し土が確認されている。

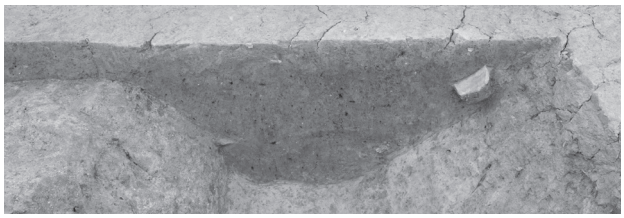




資料５　道路跡（２）

資料６は資料５の白線で示した位置での断面写真である。これまでの調査で、道路跡１の最上位層には人為的な堆積土が確認されており、埋没の最終段階に埋め戻し行為があったことが想定されている。一方、道路跡２には道路跡１のような人為的な堆積土は確認できず、概ね自然に埋没した可能性が高い。このように２条の道路跡には堆積状況に大きな差が確認されているが、第83次調査においても同じ様相が確認されている。



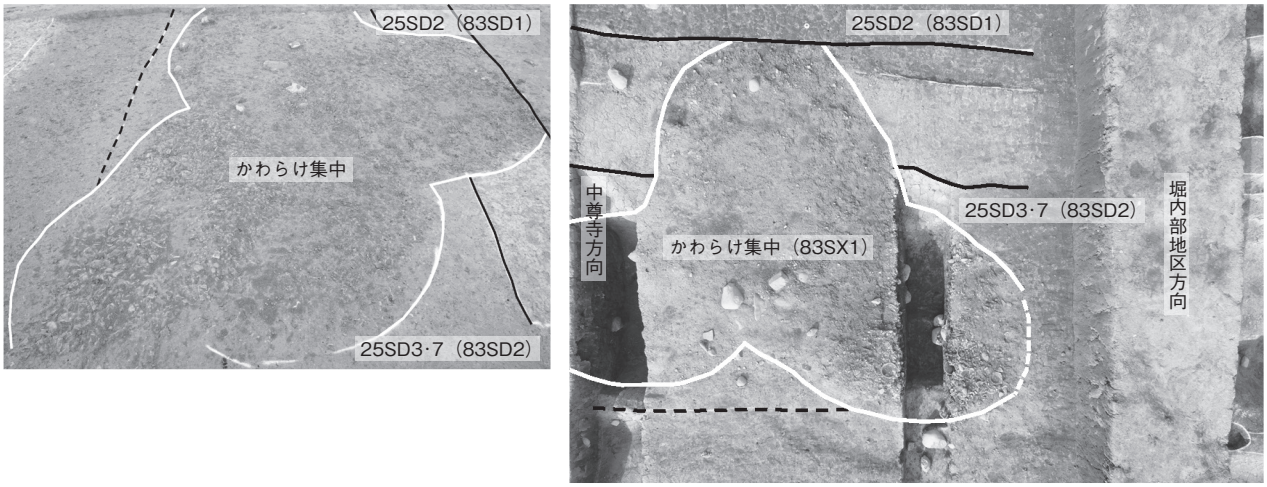


資料６　道路跡（３）

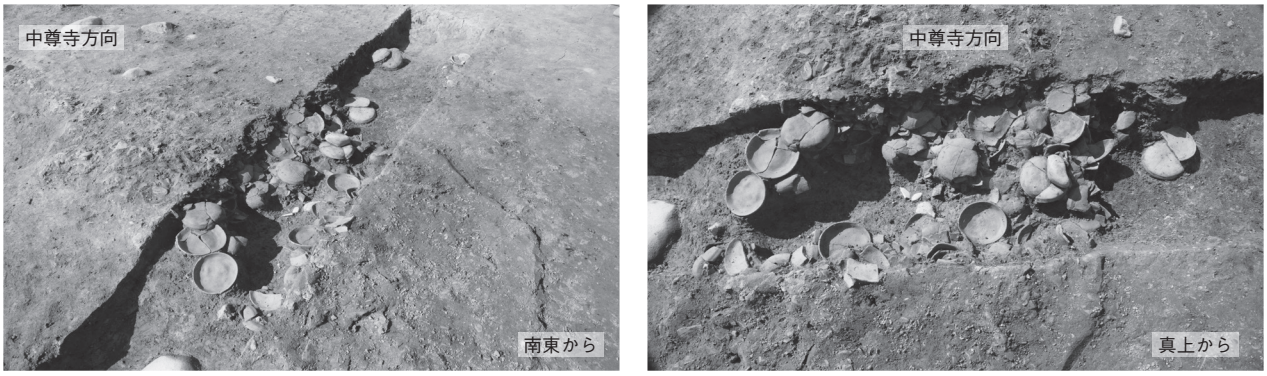
（２）かわらけ集中

２条の道路跡に関係するものとして、調査区中央付近でかわらけ集中を確認した。資料７の左側の写真は検出段階の写真、右側の写真は調査が進んだ段階に真上から撮影したものである。道路跡１の北側側溝である25SD3･7（83SD2）を被覆し、道路跡２の北側側溝である25SD2（83SD1）の構築に

よって北側の一部が失われている状況である。井戸跡のような円形のプランが複数重複しているような状況であり、堆積状況の確認と合わせて、一部の掘り下げを行った。検出段階では細片主体であったが、掘り下げを行うと、資料８のように完形や完形に近いかわらけが多く確認された。現在、整理作業を進めている段階で、詳細な検討はこれからであるが、このかわらけ集中は、手づくねかわらけが主体を占めており、12世紀後半以降に形成されたものと想定している。

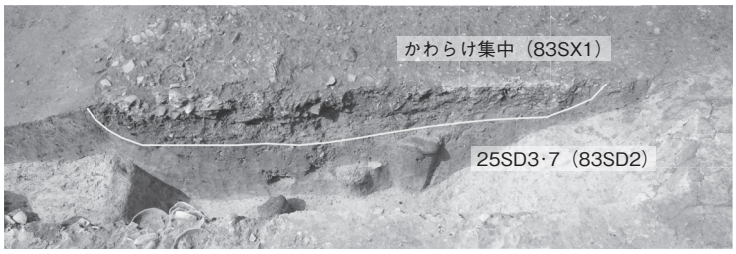


資料７　かわらけ集中（１）



資料８　かわらけ集中（２）

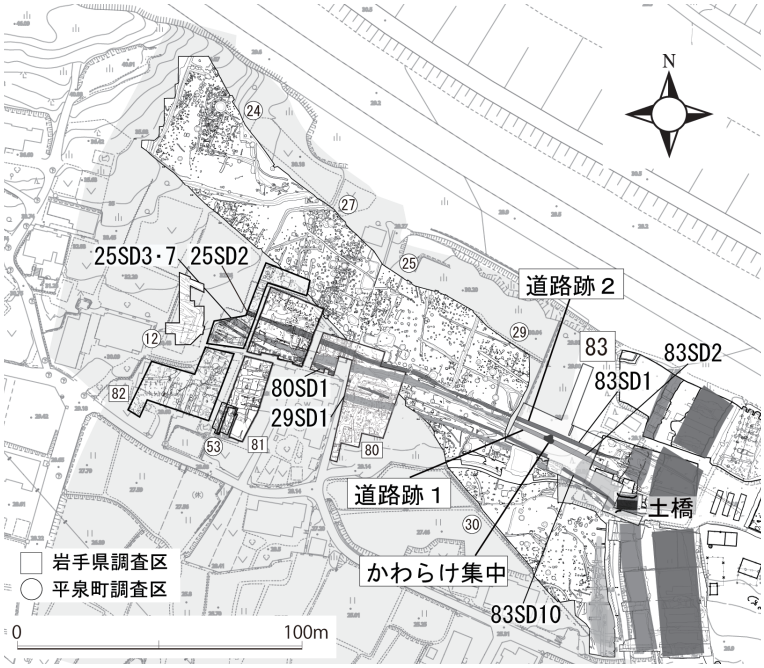
資料９はかわらけ集中の断面写真で、白線より上がかわらけ集中の堆積土である。このトレンチの精査の結果、このかわらけ集中は、井戸跡等の遺構に伴うものではなく、道路跡１の北側側溝が埋没する最終段階に形成されたものであることが把握された。このかわらけ集中が２条の道路跡に介在することで、これまでの調査で得られた成果である道路跡１から道路跡２への変遷を裏付けるだけではなく、道路跡の年代観の検討が深化できる資料が得られたのは大きな成果である。



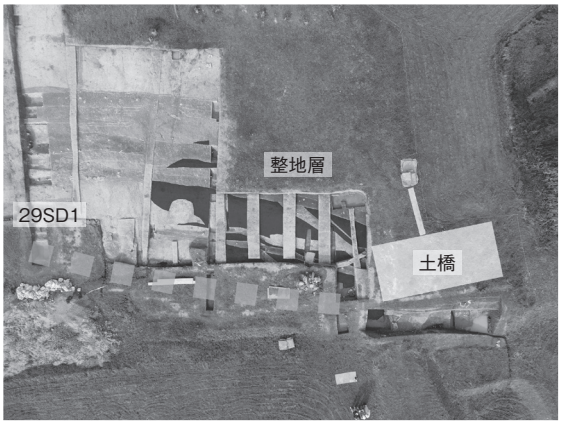
資料９　かわらけ集中（３）

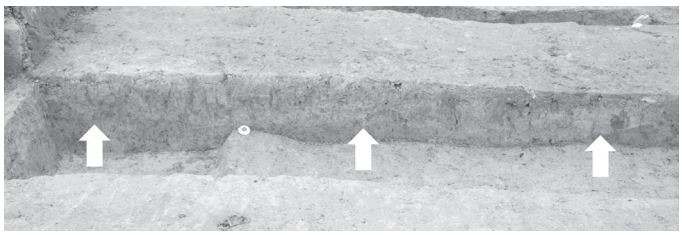
（３）整地層

第83次調査も含め、外側の堀跡周辺では整地層が確認されている（資料10）。資料11には第83次で確認された整地層の範囲を黒色で示した。断面写真では白矢印で示した部分が整地層である。第83次調査で確認した12世紀の遺構はこの整地層を切って構築しているのが確認されており、この整地層は第83次調査で確認した遺構の中で最も古いものと想定される。この整地層の南側は近世以降の土地改変による影響を大きく受け、12世紀の堆積層が確認できなくなっており、整地層の広がりを確認することはできなかった。そのため、整地層の広がりは外側の堀跡周辺に限るものなのか、堀外部地区のその他の範囲にも広がるものなのか、整地層の広がりを把握するためには、道路跡より南側の範囲で、残存状態が良好な部分を厳選して調査を実施する必要があるものと考えられる。この他にも、図示はしていないが、道路跡２の延伸方向に位置する、土橋よりも北側の外側の堀跡周辺でも整地層もしくは埋め戻し土と想定されている堆積土が確認されている。



資料10　整地層（１）





資料11　整地層（２）

（４）区画溝

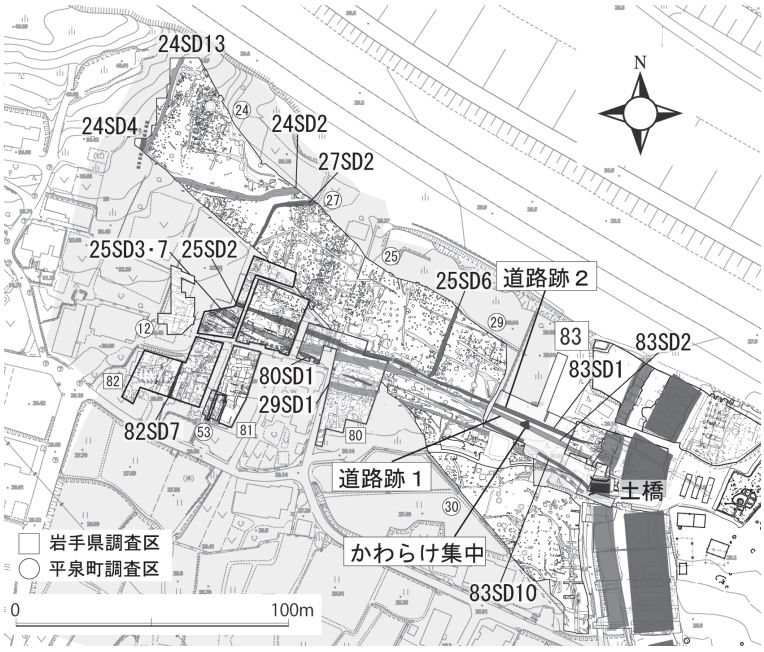
道路跡より北側の範囲では５条の区画溝が確認されている（資料12）。これらの区画溝の変遷が検討されているが、道路跡が１条であるとされていた第80次調査以前のもので、２条の道路跡との関係を把握するのは、これからの課題である。ただし、５条の区画溝の中で、一番東側に位置する25SD6は道路跡２の北側側溝と一連で道路跡より北側を区画する溝と考えられていたことを考慮すると、少なくとも25SD6は道路跡２が機能している段階においても区画溝としての機能を有していた可能性が

高いと考えられる。この他、第82次調査では、区画溝の一つである27SD2と道路跡を挟んだ位置に82SD7が確認されており、道路跡の南側においても、区画が存在していた可能性が想定される。また、第83次調査においても、25SD6と並行し、道路跡の手前で途切れる溝の一部を確認しており、さらに東側にも区画が存在する可能性が考えられる。

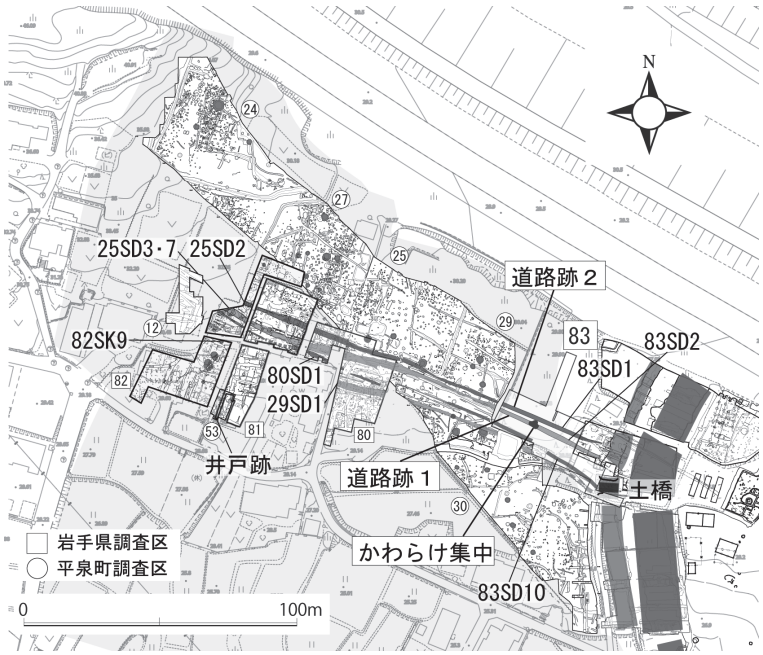
（5）井戸跡

資料13には堀外部地区で確認された井戸跡を示した。建物が多く確認されている道路跡北側だけではなく、道路跡南側にも広く分布している。これらの井戸跡がどの時期に位置付けられるか詳細な検討を加えなければならないが、道路跡南側も道路跡北側と同じように利用されていたことが想定される。

この中で、第53次調査で検出した井戸跡と第82次調査で検出した井戸跡（82SK9）から出土した遺物に注目したい。資料14に示した。一番左の墨書板が第53次調査で検出した井戸跡から出土したもの、その他の遺物は第82次調査で検出した井戸跡から出土したものである。この墨書板には杓、尺師、桶などと墨書されている。第82次調査の井戸跡からは、杓子状の木製品、曲げ物の底板や側面の板が出土しており、墨書板の内容との関連が想定される遺物が出土している。右側の写真は土師質の壺で、平泉では出土例のないものである。参考になる資料としては、茨城県の土浦市や石岡市で出土した蔵骨器や経筒の外容器として使用された壺が挙げられ、北関東との関連が想定される。このような遺物も踏まえて堀外部地区の様相を検討していかなければならないと考えている。



資料12　区画溝

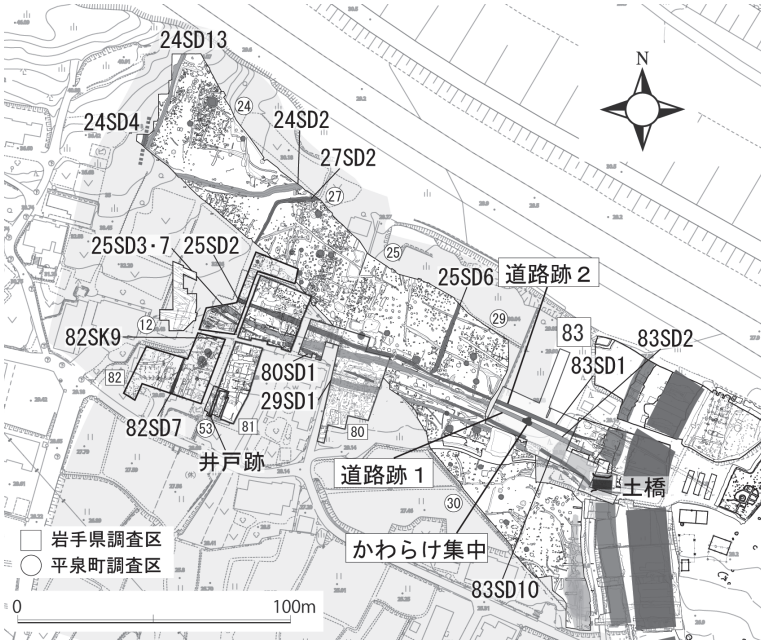


資料13　井戸跡

資料14　井戸跡出土遺物

3　まとめ

第83次調査により得られた新たな成果は次の３点である。第１は道路跡の変遷を裏付ける良好な資料を得たこと、第２は道路跡の年代観、特に道路跡１から道路跡２に変遷する時期を検討する資料が得られたこと、第３は古い時期の道路跡１は土橋との関連性が強いと指摘できること、である。そして、今後の課題としても３点挙げられる。第１は道路跡より北側の遺構群が道路跡とどのように対応するのか検討しなければならないこと、第２は道路跡より南側の様相が不明確であるため、内容を確認する必要があること、第３は内側の堀跡が機能する段階において、堀内部地区と堀外部地区がどのようにつながっていたかを検討すること、である。



資料15　まとめ

第２次計画は「区画の検討」で、今年度はその初年度であったが、第83次の調査成果を踏まえると、昨年度に引き続き、道路跡の検討が主体となった。令和４年度は第83次調査の北側の範囲を対象として調査を実施する予定である。このことにより、道路跡より北側の大部分の範囲を調査することとなり、北側の様相をより詳細に検討していきたいと考えている。

北宋の都城開封における宗教的空間

劉　海宇

はじめに

奥州藤原氏の政治・行政拠点としての平泉が、東・北アジアにおいて独特の位置にあることを明らかにするため、東・北アジアにおける前近代の政治都市（拠点）の成立過程及びその構造を検討し、関連する文献および考古資料の精読に基づいて整理したうえで、12世紀における平泉との比較研究を行うことが必要であり、2020年度から岩手県と岩手大学との共同研究が発足された。なお、平泉における政治・行政上の拠点の淵源を中国都城にさかのぼらせ、平泉の拠点造営が人類の価値観交流の産物であるかを明らかにするため、中国唐宋期における中心都市の寺院に関連した資料を中心に、都市造営と寺院との関係及び寺院建立の理由とその位置関係を示す史料を収集して整理した（劉海宇2015）。昨年度は、隋唐洛陽における宮城の空間構造（隋から則天武后期を中心として）について、仏教的な視点から関連資料を調査・整理して考えることにした（劉海宇2021）。

本年度は、北宋（960－1127）都城の開封における主要な宗教的空間に焦点を当て、それらの宗教施設（寺院や道観）の概要及びその政治的な役割を整理して、北宋皇帝の宗教施設への行幸とその政治的目的及び入宋僧成尋の礼拝した開封仏教寺院などを概観し、日本の北宋仏教文化に対する受容及び平泉との関連性について考えてみたい。

1　北宋都城開封の概況

開封は、洛陽の東200キロに位置し、隋の煬帝に開削・整備された大運河沿線の要所で、水運に恵まれた都市である。五代十国時代（907－960）では、開封は、全国の物流集積の拠点となり、後梁（907－923）・後晋（936－946）・後漢（947－950）・後周（951－960）の都城であった。『宋史』食貨志漕運条に「宋都大梁（開封）は、四河有りて以て漕運を通ず。汴河と曰ひ、黄河と曰ひ、恵民河と曰ひ、広済河と曰ふ。而も汴河の漕ぐところは多きとなす」とある。汴河とは、隋の煬帝に開削された通済渠のことで、開封城内の南部を貫通し、大運河の一部である。江南地区所産の米穀は、おもに汴河の漕運によって首都開封に運ばれた。水運の利便性こそ五代諸王朝及び北宋が開封を首都とする理由である（青山定雄1963）。

北宋時代の開封は、宮城・内城・外城からなっている。宮城は、皇城や大内とも呼ばれ、周囲約2500m、内城の北部に位置している。内城は、旧城・里城・闕城とも呼ばれ、唐代汴州城のもとに修築され、ほぼ正方形を呈しており、周囲11550m である。外城は、後周顕徳三年（956）に世宗によって内城の外側に増築されたものであり（『五代会要』城郭）、内城（旧城）に対して新城・羅城とも呼ばれた。それは、周囲29120m、南北やや長く東西やや短い長方形を呈している（劉春迎2004）。北宋時代に外城の修復工事が十数回行われ、そのなか真宗皇帝大中祥符年間（1008－1016）・神宗皇帝熙寧年間（1068－1078）・徽宗皇帝政和年間（1111－1117）の三回は大規模な修復であった。

北宋開封の内城は、後周開封の里城を継承したもので、後周のそれは唐代汴州城のもとに造営されたものである。唐代建中二年（781）に汴州刺史李勉は、大規模に汴州城を増築し、後世の開封城の基礎を築いたのである。後周広順二年（952）に太祖の郭威は開封の城壁を修復した（『五代会要』城郭）。北宋時代に仁宗皇祐元年（1049）と嘉祐四年（1059）に内城の城壁を修復したことがある。宮城は、内城の北部に位置しており、北宋太祖皇帝が建隆三年（962）に五代の宮城をもとに、洛陽の

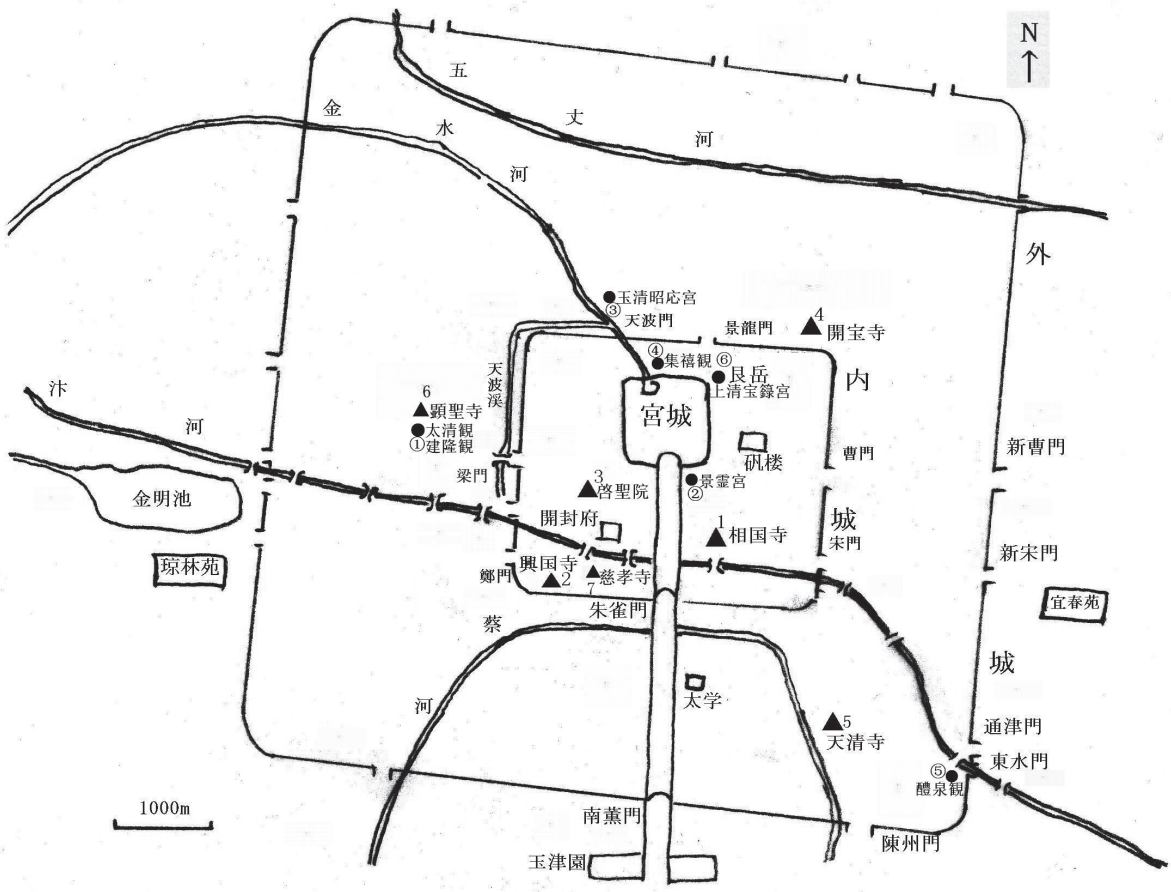


図１　北宋の都城開封の平面図と主要な寺院道観の位置（劉春迎2004二二頁図をもとに作成）

寺院（▲）：1. 相国寺　2. 興国寺　3. 啓聖院　4. 開宝寺　5. 天清寺　6. 顕聖寺　7. 慈孝寺
道観（●）：①太清観・建隆観　②景霊宮　③玉清昭応宮　④集禧観・中太一宮　⑤醴泉観
⑥上清宝籙宮・艮岳

宮殿を模倣して修築したものである。その後、太宗雍熙三年（986）と真宗大中祥符五年（1012）に修復工事が行われたことがある（図１）。

２　開封宮城の宗教的空間―内道場

開封の宮城は、内城の北部に位置しており、皇帝が国事行為を行うところで、また皇居の宮殿などのある所である。内道場とは、宮中に設けられた宗教（仏教や道教を含む）の修行をするための所である。隋唐時代における内道場は、宮中における仏・道を「修行」する場だけではなく、時には仏典の訳場及び国家的宗教統制の行政機関でもあり（陳金華2019）、おおよそ宮城内及び禁苑の中に位置している（劉海宇2021）。北宋時代の内道場は、基本的に唐代の内道場の性格を継承しつつ、皇帝の好みや政治的必要性によって流動的でもある。北宋時代では、大半の皇帝が仏教と道教を同じように重視する宗教政策を採用するが、中に神宗と徽宗のように道教を重んじる皇帝もいた。

北宋太祖と太宗皇帝は、後周世宗（在位954－959）の廃仏と対照的に、仏教を容認する政策に転換した。太祖は乾徳五年（967）七月に「存留銅像詔」を下し、仏像の「存奉」を命令した（『宋大

詔令集』巻223)。太宗皇帝は、「浮屠氏之教有裨政治（浮屠氏の教は政治に有裨なり）」（『宋太宗実録』巻26）という認識をもち、仏教の政治利用をはかった。『仏祖統紀』巻四十三によれば、太祖皇帝は、乾徳三年（965）に雲門禅師の真身を宮中に一か月ほど供養し、翌年に益州の献上した金字金剛経を天清寺沙門崇蘊に大内で講演せしめ、さらに開宝五年（972）に京城の名僧玄超等をして金字大蔵経を大内で誦せしめたという。同書には、太平興国三年（978）に「令僧統賛寧奉釈迦舎利塔入見於滋福殿。（中略）滋福殿者、安仏像経蔵、立刹声鐘即内道場也（僧統賛寧をして釈迦舎利塔を奉り滋福殿に入見せしむ。（中略）滋福殿は、仏像・経蔵を安んじ、刹を立て鐘を声にするは即ち内道場なり）」とあり、太宗皇帝は、滋福殿で大蔵経と仏像を安置し、賛寧に釈迦舎利塔を持って謁見させ、滋福殿を内道場にしたという。同書には、さらに雍熙二年（985）に「詔両街供奉僧於内殿建道場、為民祈福、歳以為常（両街の供奉僧を詔し内殿に道場を建てしめ、民が為に祈福し、歳ごとに以て常と為す）」とあり、太宗皇帝は内道場を立て、両街の供奉僧に民のために祈福させることを毎年の常例仏事にしたという。また、入宋僧の奝然は、滋福殿で栴檀釈迦瑞像を拝見したことがある（塚本2011）。滋福殿は、もと皇儀殿と呼ばれ、宮城紫宸殿の西側に位置する宮殿である（『宋史』地理志・京城）。このように、太祖と太宗皇帝は滋福殿に仏像を荘厳して大蔵経を安置した仏教の内道場を立てたことがわかる。それが民心の収攬という政治的目的を含んでいると指摘されている（横井克信1999）。一方、太祖と太宗皇帝は、仏教のみならず道教に対しても重視している。例えば、太祖皇帝は、水旱災害に遭うたびに莱州道士の劉若拙を「必召於禁中、設壇場致祷（必ず禁中に召し、壇場を設けて祷りを致さしむ）」（『続資治通鑑長編』巻十三）、と宮中に道教の内道場を設けて祈祷を行った。また、太宗皇帝は、道士の陳摶を重んじて、「摶を闕下に留」め、またその修業場の雲台観を修繕した（『宋史』隠逸列伝）。

その後の真宗は道教と仏教両方を重視し、王朝の統治に有益であるとした。真宗は、天禧三年（1019）に宮城正殿の天安殿で天地に答謝するための道場を立て、沙門・道士一萬三千八十六人を集めて式典を行ったという（『仏祖統紀』巻四十四）。仁宗皇帝は、比較的仏教に興味を示し、天聖九年（1031）に南華寺の六祖恵能の衣鉢を大内の清浄堂に奉安して供養したことがあり、また、慶暦三年（1043）に開封相国寺の仏牙を内殿に迎えて自ら祈雨の儀を行ったという（『仏祖統紀』巻四十五）。この記録によれば、仁宗皇帝は宮城の清浄堂において内道場を設けたことがわかる。

神宗皇帝の内道場は宮城後苑の瑶津亭にある。熙寧六年（1073）三月に入宋僧成尋（『宋史』日本列伝では「誠尋」と記される）がそこの祈雨と謝雨道場で十日間の修法したことを、その日記『参天台五台山記』（以下は『参記』と略す）に事細かく記している（小川貫弌1980）。『参記』巻七には、宮城北側後苑に方二町の大池があり、池の中島に神宗皇帝の「御念誦堂」の大宝殿が八角二階建ての建物で、瑶津亭と呼ばれており、池に竜頭舟が十数隻浮かべているとある。さらにこの瑶津亭・大宝殿の荘厳について、弥勒・釈迦・薬師の三幅画像が本尊として安置され、その東と西の壁面に十六羅漢像の画像が東西に八幅ずつかけられている。正面の本尊画像に向かって、九曜七星の十七星像が東に八幅、西に九幅がかけられ、その中に十大明王像・降三世二臂像・軍荼利二臂像・吒紇明王如不動尊などの画像も安置されている。また、成尋は、祈雨と謝雨の作法についても記しており、神宗の内道場を知るには重要な資料を残した。ここで指摘したいのは、この内道場の仏像がすべて画像であることである。その理由は、僧侶による仏教的な祈雨と謝雨の修法が終了すると、画像が外されて、この瑶津亭の宮殿が別の用途に使用されるからであろう。言い換えれば、神宗の内道場は臨時的なもので、流動的であることが伺えられる。

また、神宗期には元豊二年（1079）十月に皇太后曹氏が崩御する際、禅師道臻が大内の慶寿宮で説

法に召されたという（『釈氏稽古略』巻四）。その翌三年正月に皇太后追福のため、千僧斎が大内で行われたという（『仏祖統紀』巻四十五）。哲宗期にも禅師道臻が福寧殿に召され高座で説法したという（『釈氏稽古略』巻四）。これらの内道場も場所が一定せず、その臨時性が物語られる。

徽宗皇帝は、即位当初に仏教に興味を示したが、崇寧三年（1104）に相国寺の仏牙を大内に迎えて供養したり、政和二年（1112）に嘉州の古樹から出てきた定僧を禁中に召したりすることがあった（『仏祖統紀』巻四十六）。しかしその後、道士の林霊素を寵愛し、道教の信奉者となり、仏教に対する抑圧政策をとった。徽宗は、政和三年（1113）に宮中福寧殿の東に道教の内道場として玉清和陽宮を建ててのちに玉清神宵宮と改名し（『宋史』地理志）、林霊素に「通真達霊先生」号を賜り、盛大に「千道会」という大斎を行ったという（『宋史』方技伝）。また宮城内に明堂や延福宮が建造された。この玉清神宵宮は、臨時的な内道場ではなく、常設のものの可能性が高い。

３　開封城内の主要な宗教的空間

北宋開封の内城には、中央官庁・地方官衙・仏院道観・商業施設などが集中しており、開封のもっとも繁栄したところである。一方、内城と外城との使い分けがはっきりしてはいないため、ここでは開封城内の主要な宗教空間について概観してみたい。宗教的空間としては、仏寺と道観に分けられるが、北宋初期に既存したものがあれば、北宋歴代皇帝に新造されたものもある。以下は、仏寺と道観の両面から王朝の政治と関係が深い主要なものについてまとめる。

（１）仏寺

相国寺、内城の南東部に位置しており、北斉時代に建てられ、唐代中宗が相王から即位したことで相国寺と改名されたという（『仏祖統紀』巻四十三）。汴河の埠頭がすぐそばにあるため、相国寺は、北宋初期から商品集散地となり、太宗至道二年（996）に雄大な楼門が造られ、御筆金字「大相国寺」額がかけられた（『燕翼貽謀録』巻二）。太祖・太宗から欽宗まで歴代の皇帝は上元節に多く相国寺に行幸し、またここで祈雨、祈雪及び祝寿のための道場を行った（『宋史』・『宋会要輯稿』等）。地方から召した僧侶や外国の使者などを相国寺に泊めたりしていた（『宋史』方技列伝・同外国列伝）。

太平興国寺、内城の南西部に位置しており、唐代の龍興寺で、太祖開宝二年（969）に修復され、太宗太平興国元年（976）に太平興国寺と改名され、同五年（980）に大殿の西に訳経院（のちに伝法院と改名）が造られたという（『事物紀原』巻七）。太宗から歴代皇帝が興国寺に上元節の行幸をしたり、祈雨・止雨のための道場を行ったりしていた。真宗は、景徳二年（1005）に伝法院に新訳仏典を御覧した（『宋史』真宗本紀）。また、仁宗天聖八年（1030）に太祖の御容が興国寺奉先殿に安置されたという（『宋史』仁宗本紀）。奝然や成尋のような外国の僧侶をも興国寺に泊めたりしていた（『宋史』日本国列伝、『参記』巻四）。

啓聖院、内城の南西部に位置しており、五代後晋の軍営の護聖営で太宗皇帝誕生の地であったため、雍熙二年（985）に寺院「啓聖禅院」として建造されたという（『事物紀原』巻七）。至道二年（996）八月、啓聖院の永隆殿に太宗皇帝の聖容が安置された（『宋会要輯稿』礼十三）。入宋僧の奝然が将来した清凉寺釈迦如来像は、啓聖禪院の釈迦像の模刻とされている（塚本2011）。太祖・太宗・神宗など歴代皇帝の御容が安置された。歴代皇帝は上元節の行幸や祈雨・止雨の道場をおこなった（『宋史』）。

開宝寺、内城外側の東北部に位置し、北斉天保年間に創建され、唐開元十七年に封禅寺と改名され、北宋開宝三年（970）に開宝寺と改名された。なかに福勝塔院があり、呉越国阿育王塔からの仏舎利を安置するための塔が建造されたという（『仏祖統紀』巻四十三）。太祖皇帝は、開宝寺に行幸し

て新鐘や大蔵経の完成を御覧したりした。太宗皇帝が開宝寺で科挙合格者「進士」に饗宴を賜った(『宋史』選挙志)。その後、歴代皇帝が多く開宝寺に行幸し、また祈雨道場をも行ったりした。

天清寺、外城の東南部に位置しており、後世宗顕徳年間（954－958）に創建されており、大平興国二年に修復されたという（『汴京遺跡志』巻十)。開宝年間、六角形のレンガ造りの繁塔が建てられ、現在も聳え立つ。北宋時代に、天清寺で多く祈雨道場が設けられ、仁宗・神宗皇帝が数多く行幸したことがある（『宋史』真宗本紀・同英宗本紀・同五行志)。

顕聖寺、内城西門の大梁門の西北部に位置しており、五代後周顕徳四年（957）に創建されたという（『汴京遺蹟志』巻十)。寺内に感慈塔があり、北宋韓維の「顕聖寺感慈塔為立御篆碑了畢道場斎文」(『全宋文』第49冊）により、そこに皇帝の篆書石碑が建てられたことが分かる。太宗至道二年（996）に祈雨道場を行い、天聖六年（1028）に仁宗皇帝が行幸した（『宋会要輯稿』)。

慈孝寺、城内雷家橋の西南部に在り、もとは駙馬都尉呉元扆の住居で、天聖二年（1024）十二月に勅命により寺院とされ、同五年（1027）に真宗皇帝の肖像が殿内に供養された（『汴京遺蹟志』巻十)。仁宗皇帝と太后は行幸したことがある（『宋史』魯宗道列伝)。

（２）道観

太清観、大梁門外の西北に位置し、後周世宗に創建されたものであった。北宋太祖が建隆の改元に合わせて「建隆観」と改名したとされるが（『汴京遺跡志』巻十)、『宋史』礼志に太祖皇帝が建隆元年に太清観・建隆観両方を行幸したとあるため、疑問が残る。太祖皇帝が四回太清観に行幸したことがあり（『宋史』太祖本紀)、太祖と太宗皇帝が十回ほど建隆観に行幸した記録があり、そのなか雍熙三年（986)・四年（987）及び淳化二年（991）に祈雪道場を行った（『宋史』太祖・太宗本紀)。

景霊宮、宮城南門宣徳門の外側に位置しており、大中祥符五年（1012）に真宗皇帝によって造営された趙氏の始祖を奉祀する道観である。神宗元豊五年（1082）に北宋歴代皇帝の遺容が安置されて皇家の太廟として改造された（『文献通考』巻九十四)。徽宗崇寧年間（1102－1107）に御街の東西に西宮と東宮の二つに拡張された。真宗皇帝以降、北宋の歴代皇帝は多く景霊宮に行幸し、祖先祭祀や朝献等の式典を行い、その回数がなんと百回近くあった。

玉清昭応宮は内城北門の外側、外城の西北部に位置しており、真宗皇帝によって建造された重要な道観である。景徳二年（1005）に、北宋は遼との間に「壇淵の盟」を結び、毎年遼へ銀10万両・絹20万疋を歳幣として送ることを約束した（『遼史』聖宗本紀)。屈辱的な「城下の盟」を結んだという朝野の誹りをそらすため、道教を崇拝した真宗皇帝は、皇帝の権威を強化するため天書が降下したという演出をし、また泰山で封禅の儀を行った。その後、大中祥符元年（1008）に開封宮城北門の外に天書を安置するための玉清昭応宮を建てた。真宗・仁宗皇帝は行幸して、薦献式典や祈雨道場を重ねた。

集禧観・中太一宮。集禧観は仁宗皇祐六年に造営された。神宗のとき、その東側に中太一宮が造営された。神宗皇帝は、ここで上元節の行幸、饗宴及び祈福などを行った（『宋史』神宗本紀)。徽宗の時に五岳観と改名されたようである。所在位置の変動もあったとされている（劉夢琴2016)。

醴泉観、仁宗至和二年に創建されたもので（『宋史』仁宗本紀)、東水門の内側に位置している（『汴京遺跡志』巻十)。その後の英宗・哲宗・欽宗皇帝等が多く醴泉観に行幸し、祈雨等をも行った（『宋史』)。

上清宝籙宮、宮城東門の外側に位置しており、道士林霊素によって政和五年（1115）に建造された。徽宗の往来の便利のため、宮城の景龍門から宝籙宮まで復道（渡廊下）が造られたという。また、政和七年（1117）に上清宝籙宮の東側に周囲十数里の万歳山艮岳が造られた（『宋史』地理志)。艮岳が上清宝籙宮の一部として建造された可能性があり、徽宗の道教信仰による神仙世界でもあると

考えられている（久保田和男2007）。

以上の資料で分かるように、寺院の多くは前代より継承されたものではあるが、一方、道観の多くは北宋期に創建されたものである。特に真宗と徽宗皇帝は、道教を崇拝してそれを政治的に利用したため、道観を多く建立したのである。

４　北宋皇帝の行幸と開封の宗教的空間

行幸とは、皇帝が宮城から外出して目的地に赴くことである。皇帝の行幸は、皇権を誇示してその支配を正当化する政治的目的が多い。北宋の皇帝は、百姓の幸福を祈願するために開封の寺院や道観に行幸することが多く行われた。学者の統計によれば、北宋皇帝の行幸回数を寺院・道観別（景霊宮が太廟であるため、別項目統計）に以下に示す（久保田和男2007）。

	太祖	太宗	真宗	仁宗	英宗	神宗	哲宗	徽宗
在位年数	16	21	25	41	4	18	15	25
寺　　院	34	26	62	47	3	26	11	3
道　　観	8	6	81	46	1	26	36	24
景 霊 宮	0	0	13	15	1	16	34	12

皇帝行幸の目的地は、時代によって違うが、行幸の回数はその在位年数と直接関係がある。同じ皇帝が寺院と道観に行幸する回数は、その時代における仏教と道教の勢力差が伺える。毎年の恒例行事として、正月と上元節に、皇帝は寺院や道観に行幸し、百姓のために幸福を祈願する。その後、宮城正門の宣徳門に御し、百姓とともに元宵の提灯祭りを楽しむことが多い。北宋皇帝行幸の行列について、沈括の『夢渓筆談』に「車駕行幸、前駆これを隊と為し、則ち古の清道なり。其の次ぎ衛仗。衛仗は、闌入宮門法に視（なぞら）へ、則ち古の外仗なり。其の中これを禁囲と謂ふ」と記されており、前駆・衛仗・禁囲からなり厳重な護衛の下に華やかなものである。その詳細について、真宗皇帝が泰山で封禅の儀へ向かう時の行列が壁画として泰山岱廟天貺殿「起蹕回鑾図」に詳しく描かれている（劉慧2003）。

上元節行事の前における皇帝行幸する目的地は、時代によって変化を見せている。真宗は啓聖禪院・玉清昭応宮に行幸する。玉清昭応宮が仁宗年間に焼失されたため、神宗は集禧観・中太一宮・大相国寺に行幸している。哲宗は、中太一宮・集禧観・醴泉観・大相国寺に行幸している（久保田和男2007）。皇帝の道観・寺院など宗教的空間への行幸は、百姓の幸福・国家の安定を祈願するだけではなく、皇帝の正当性と権威が誇示され、国家の政治的秩序が維持されることにもなると思われる。

５　入宋僧成尋が礼拝した開封の仏寺

入宋僧の成尋は、熙寧五年（1072）三月十五日に宋人の商船に乗り、四月十三日に杭州港に着き、五月に天台山を参拝してから首都の開封に向かった。十月十二日に開封に到着し、翌日に太平興国寺伝法院に泊まることが許可された。二十二日に神宗皇帝に謁見し、『奔然日記』四巻と円仁『入唐求法行記』三巻（四巻目に会昌の廃仏が記されたため献上しなかった）などを献上した。その際、開封城内の仏寺への焼香及び五台山への参拝を乞ったため、悉く許可された。同日に下賜された聖旨に、「大相国寺・太平興国寺・啓聖禪院・顕聖寺・感慈塔・開宝寺・福聖院」といった、焼香に行くべき寺院名が示された。そして、成尋は、翌日に太平興国寺・啓聖禪院・大相国寺に、翌々日に福聖禪院・開宝寺に焼香したことを、その日記に詳しく記した（『参記』巻四）。以下のようにその概要をまとめる。

十月二十三日に、宦官の「入内内侍省内侍殿供奉官」の案内のもと、まず広大伽藍をもつ太平興国寺で大仏殿を拝見し、そこに安置された丈六の釈迦三尊像を礼拝した。次ぎに啓聖禪院に行き、大仏

殿・盧舎那大殿・西大殿・泗州大師堂・仏牙堂などを礼拝し、そのなか西大殿に安置された金字一切経が「荘厳不可思議」だと讃嘆した。また、次ぎに大相国寺に行き、弥勒大殿・盧舎那大殿・仏牙堂などを礼拝・焼香した。翌二十四日に、宦官の「中使侍中」の案内のもと、まず福聖禪院に行き、大仏殿・東堂泗州大師像・弥勒堂・経蔵・盧舎那堂・羅漢殿などを礼拝し、そのなか経蔵の中心宝殿に安置された銀泥一切経を拝見した。次ぎに開宝寺に行き、感慈塔・羅漢堂などを礼拝した。成尋は、これらの寺院の仏殿・仏像・一切経などの状況を詳細に記しており、しきりに「甚妙」「不可記尽」などと称賛している。

これらの仏教寺院は、北宋首都開封の寺院の代表として朝廷より示されたもので、朝廷との関係が深いものと考えられる。また、その仏殿・仏像・仏典などすべてを自慢して外国僧に見せられるものでもあるのであろう。その後、成尋は、神宗皇帝に「善慧大師」号を賜れ、訳場の監事に任命され、帰国が許されず開封にとどまるようとことになり、元豊四年（1081）に開宝寺に入滅し、天台山国清寺に葬られたという（『本朝高僧伝』巻67）。

おわりに　―日本の北宋仏教文化に対する受容―

現在は『奝然日記』が散逸したが、成尋がそれを神宗皇帝に献上したため、平安時代には存在したことがわかる。その逸文が諸書に『奝然記』『奝然巡礼記』『奝然在唐日記』などの名称で引用されている（森公章2011）。奝然は、天台山と五台山に巡礼したのち、太宗皇帝に下賜された「大蔵経四百八十一函五千四十八巻・新翻訳経四十一巻」、及び帰途の台州で工匠に彫刻させた「釈迦瑞像」などを持参し、寛和二年（986）に帰国した（『奝然入宋求法巡礼行並瑞像造立記』・山口修1993）。奝然の没後、この勅版一切経は、その遺弟より左大臣藤原道長に献上され、法正寺の経蔵に安置された（上川通夫2008）。版本一切経の請来は、摂関家の一切経の書写と供養に大きく寄与し、中世の仏教史においては画期的な出来事で、日本中世の政治及び社会にも甚大な影響をもたらしたといえよう。

その後、僧寂照は景徳元年（1004）に入宋し、真宗皇帝に謁見でき、圓通大師の称号と紫方袍が下賜された（『宋史』日本国伝）。皇帝の下問に対して、寂照は、「国中専奉神道、多祠廟、伊州有大神、或託三五歳童子降言禍福事。山州有賀茂明神、亦然」と伝えており（『楊文公談苑』寂照条）、道教に信仰の厚い真宗皇帝への気遣いとは言え、日本平安期における神道を知るには有益な資料である。寂照は当時の左大臣藤原道長と密接な関係をもち、その後援を受けたゆえに入宋でき、『寂照大師来唐日記』を残したようである。寂照の日記が散逸したが、『御堂関白記』に道長が寂照及びその弟子念救とのやり取りを記録している。また、比叡山延暦寺は代々天台山国清寺との間に宗教上の行き来があり、つねに宋の最新の仏教文化を受容してきた（森公章2013「巡礼僧の系譜」）。

また、成尋は熙寧五年（1072）に同じく天台山と五台山に巡礼し、北宋の皇帝にも謁見できた。成尋は、その祈雨の成功により、神宗皇帝に善慧大師の称号が賜与された。その後、成尋本人は日本に戻ることがなく宋の地に入滅したが、先行して帰国した弟子たちに『参記』及びほかの品々を預けて日本に将来させた。日本では、成尋の事績が大きく宣伝され、天皇家や貴族たちにも知られるようになった。『水左記』承暦四年（1080）十月二十日条、『中右記』長承三年（1134）二月二十八日条に貴族たちが岩倉大雲寺に参詣して「入唐成尋闍梨旧房」や「入唐成尋阿闍梨像」などを見たことが記されている。また、『中右記』康和四年（1102）六月十九日条に白河法皇が屏風十帖の「故成尋阿闍梨入唐之間路次従日域及唐朝図絵」を制作させたという記録が残されている（森公章2011）。成尋は、天皇への供奉や藤原師実の護持僧を務めたことがあり、また宇治殿藤原頼通の信頼も厚かったため、先行帰国した弟子たちに貴族たちそれぞれへの品々を持ち帰らせた（『参記』巻六）。さらにその翌年

に白河天皇にも「方物」を貢献したという（『本朝高僧伝』巻67）。白河法皇及び摂関家などの貴族たちは、『参記』など入宋僧関連の日記や文物等を媒介にして、北宋仏教文化の最新状況を知り、それを積極的に受容したことが考えられる。例えば、『参記』に太宗皇帝の誕生の地として建立された啓聖禅院に「荘厳不可思議」の「金字一切経」を礼拝したことが記されている（『参記』巻四）。これは、白河院が発願した康和五年（1103）と天仁三年（1110）における二回の金字一切経の供養との関連性が否定できない。

奥州藤原氏三代は王家及び摂関家との関係が深く、「中尊寺供養願文」や中尊寺・毛越寺の創建及び鎮守社の勧請などからその具体的な接点と歴史的意義が指摘されている（菅野成寛2015）。平泉文化における北宋の仏教文化に対する受容は、主に王家・摂関家ないし比叡山の僧侶を介して行われた可能性が高いと思われる。

【参考文献（五十音図順）】

青山定雄　1963 『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』 吉川弘文館
上川通夫2008 『日本中世仏教史料論』 吉川弘文館
小川貫弌　1980 「北宋神宗の内道場」『仏教の歴史と文化』 同朋舎
郭学勤　2003 『北宋宗教政策研究』 河南大学修士学位論文
菅野成寛　2015 「平泉文化の歴史的意義」 柳原敏昭編『平泉の光芒』 吉川弘文館
久保田和男　2014 「宋都開封の旧城と旧城空間について」『都市文化研究』Vol16
久保田和男　2007 『宋代開封の研究』 汲古書院
顧吉辰　1993 『宋代仏教史稿』 中州古籍出版社
周宝珠　1992 『宋代東京研究』 河南大学出版社
曽布川寛　2019 「李唐筆万壑松風図と艮嶽」『古文化研究』18号
竺沙雅章　2000 「宋初の政治と宗教」『宋元仏教文化史研究』 汲古書院。
竺沙雅章　2002 「宋代宮廷の葬送と禅宗教団」 鈴木哲雄編『宋代禅宗の社会的影響』 山喜房仏書林
張驭寰　2011 『北宋東京城建築復原研究』 浙江工商大学出版社
陳金華　2019 「唐代的内道場」『華林国際仏学学刊』第二巻第二期
塚本麿充　2011 「皇帝の文物と北宋初期の開封（上）」『美術研究』第404号
塚本麿充　2012 「皇帝の文物と北宋初期の開封（下）」『美術研究』第406号
平田茂樹　2012 『宋代政治構造研究』 汲古書院
森公章　2011 「遣外施設と求法・巡行僧の日記」『日本研究』44巻
森公章　2013 『成尋と参天台五臺山記の研究』 吉川弘文館
山口修　1993 「奝然入宋求法巡礼行並瑞像造立記考」『仏教大学仏教学会紀要』通号1
横井克信　1999 「北宋の内道場について」『印度学仏教学研究』第47巻第2号
劉海宇　2015 『アジア都市史における平泉』 岩手県教育委員会等編集
劉海宇　2021 「仏教の視点から見た隋唐洛陽城宮城の空間構造―隋から則天武后期を中心として」『平泉文化研究年報』第21号
劉慧　2003 『泰山岱廟考』 斉魯書社
劉春迎　2004 『北宋東京城研究』 科学出版社
劉春迎　2019 「北宋時期的東京」『考古開封』 科学出版社
劉夢琴　2016 『北宋開封道教宮観布局研究』 遼寧大学修士学位論文

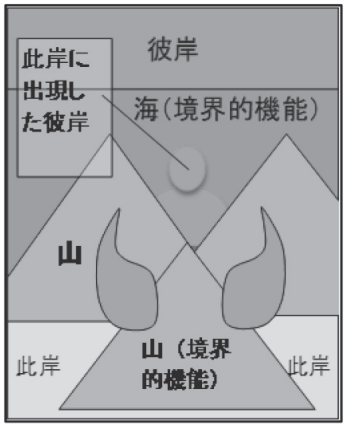
「東・北アジアにおける政治拠点と平泉の比較研究」
拠点づくりの考え方とその影響　―奥州藤原氏との比較―

大道　篤史・戸根　貴之

奥州藤原氏は12世紀の平泉に居館・寺院・信仰対象の山の三者を東西軸に並べ、類を見ない仏国土（浄土）を造形したが、令和２年度から「仏国土（浄土）」の造形をもとに「地域拠点」形成を行った事例を抽出し、比較研究を進めている。①近距離に三者が一列に配置されるもの、②居館とは離れるが、居館から見て北東方向に寺院－聖なる山（信仰対象）が位置するもの、③三者が大きく離れるものという３つの傾向がみられたが、令和３年度は東日本の日本海側を中心にして分析を行ったものである。また、参考事例として、大分県国東半島の事例を分析した。

１　はじめに

奥州藤原氏が仏国土（浄土）を平泉の地に造形した12世紀は、来世の極楽浄土往生を願う阿弥陀信仰が隆盛を迎えた時代である。そのきっかけとして1052年の「末法入り」が大きく影響している。阿弥陀信仰を色濃く反映させた絵画が12世紀以降に多く描かれることになるが、そのうちの一つに「山越阿弥陀来迎図」（右記）がある。臨終間際に阿弥陀如来とその脇に侍す観世音菩薩、勢至菩薩が来迎し、極楽浄土まで導いてくれる、という教えを描いた仏教絵画である。２人の菩薩は山を下りて此岸にわたり、阿弥陀如来は極楽浄土から此岸と彼岸の境界である山際まで来迎することが描かれ、此岸と彼岸と境界である山が一体として描かれる。そのように山は聖なる場所として意識されてきたといえる。



永観堂禅林寺所蔵

現段階では、柳之御所遺跡（居館＝御所）を「此岸」とし、無量光院（寺院＝御堂）を「彼岸」の造形と見立て、その両者が近接化するのが12世紀の特徴といえると考えている。さらに周囲の小丘陵状の地形を信仰対象の山とし、その三者を「仏国土（浄土）」としての造形が見られる。

平泉のような「仏国土（浄土）」の造形をもとに「地域拠点」形成を行った事例が見られるのか、またそれは奥州藤原氏の「平泉」の影響を受けたものか、について比較検討を進め、世界遺産の拡張へ向けた学術的成果を蓄積していきたい。

２　調査の進め方

令和２年度から岩手大学との共同研究を5か年計画で進めることとなった。本テーマは世界遺産としての平泉の新たな学術意義を確認するため、東・北アジアにおける前近代の政治都市（拠点）の成立過程を検討し、12世紀における平泉との比較研究を行い、政治・行政拠点としての平泉が、東・北アジアにおいて独特の位置にあることを明らかにすることを目的とし、実施方法として以下の項目を掲げている。

・東・北アジアにおける前近代政治都市（拠点）の成立過程の調査（とくに宗教との関係）
・日本列島の近世以前における政治都市（拠点）の成立過程の調査（とくに宗教との関係）
・政治拠点「平泉」の成立過程の調査

今年度の研究計画

昨年度に引き続き、日本列島の近世以前における政治都市の成立過程を整理することとし、以下の方法で進めることとした。

①　比較する項目について

12世紀に特徴的な　御所（居館）－御堂（寺院）－信仰対象の山　の近接化について、それぞれ以下のような項目を備えた事例を中心に集成する。

a　居館遺跡の特徴として
●土師質土器（かわらけ）を多く有すること
●中国産陶磁器や青白磁の出土がみられること
●大規模な掘立柱建物

b　寺院の特徴として
●仏堂の規模が確認できること。(阿弥陀堂に限定しない)
●仏堂前面に園池を持つこと

c　「聖なる山」=「信仰対象の山」として
●寺院または居館周辺に眺望可能な小丘陵状の地形が位置すること
●小丘陵の「聖的 = 信仰的」な対象として以下のいずれかの特徴をもつこと。
・西方に位置する。　・経塚を持つ。　・廟・墓所を持つ。

②　今回の調査箇所

（１）山形県　遊佐町
山形県　鶴岡市田川
（２）新潟県　胎内市中条
新潟県　阿賀野市水原・安田
（３）大分県　豊後高田市

なお、以下で示す地図については国土地理院で公開している地理院地図を使用した。

3　各地域の事例

（1）山形県　庄内平野

①　遊佐荘（山形県飽海郡遊佐町）　居館○－寺院（園池）○－信仰対象の山○

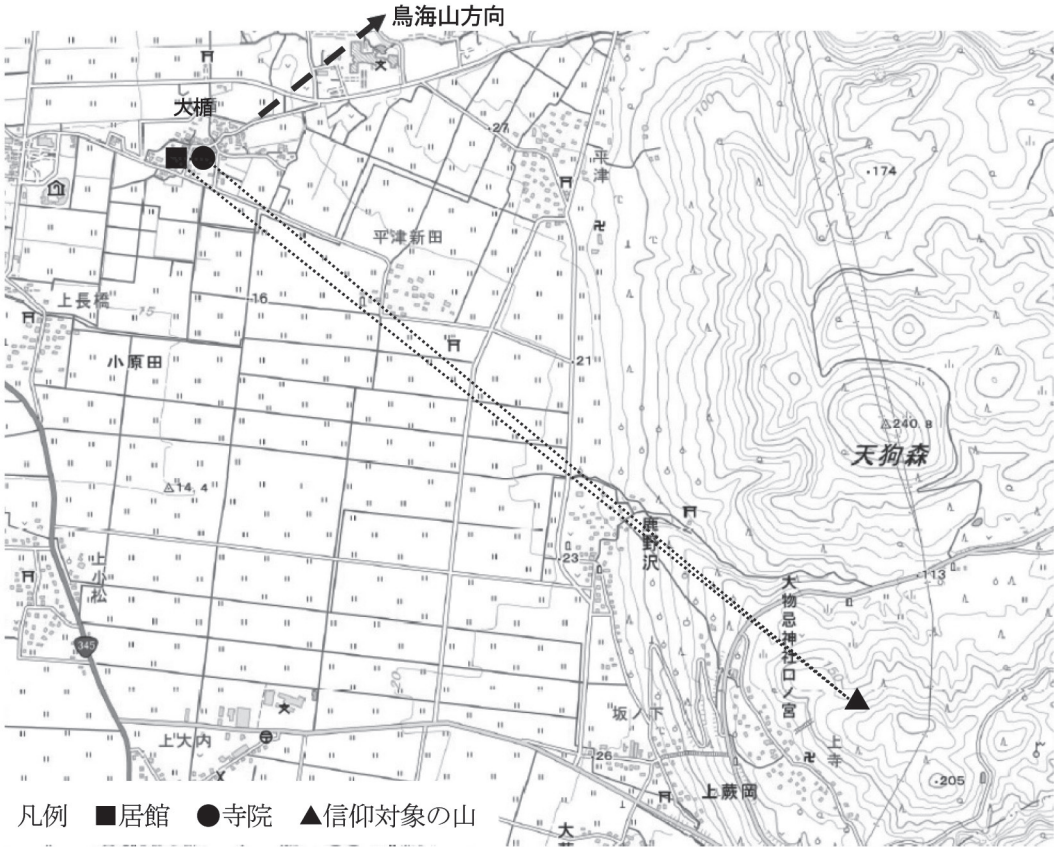
■居館　●寺院　大楯遺跡（出羽国遊佐荘）　12世紀

比爪氏の「川北冠者三郎忠衡」の拠点の伝承もある。摂関家領の荘園であった遊佐荘を管理していた在地領主の居館を伴うとされる。なお、この荘園は藤原基衡が実質的に管理していたとされる。

東西軸の３×４間で東側に張出を持つ仏堂跡（推定）を伴い、阿弥陀堂と推測される。

▲信仰対象の山　鳥海山（数か所に大物忌神社あり）

大楯遺跡の東方に位置。鳥海山の麓には数か所に大物忌神社が位置する。



大楯遺跡から鳥海山方向を望む

３×４間で東側に張出を持つ仏堂の礎石跡

・大量の出土品の８割がかわらけであり、手づくね、ロクロ使用のものがそれぞれ大小の器形である。国内産陶器として珠洲系、常滑系、瀬戸美濃系など、輸入磁器では中国龍泉窯系のものが中心で、青磁・白磁・青白磁とみられる。

◎政庁・居館、寺院は隣接して位置し、信仰対象の山も眺望できることは平泉と共通する。居館と周囲の施設の関係からは、東西軸など仏教的方位に基づいた空間設計が顕著には見られない。

② 山形県鶴岡市田川

居館○－寺院？－信仰対象の山△

■居館　田河館跡　12世紀後葉と推定。

藤原泰衡の郎従といわれ、奥州合戦の際に鎌倉軍と戦い敗れた田河太郎行文の居館と推定される。

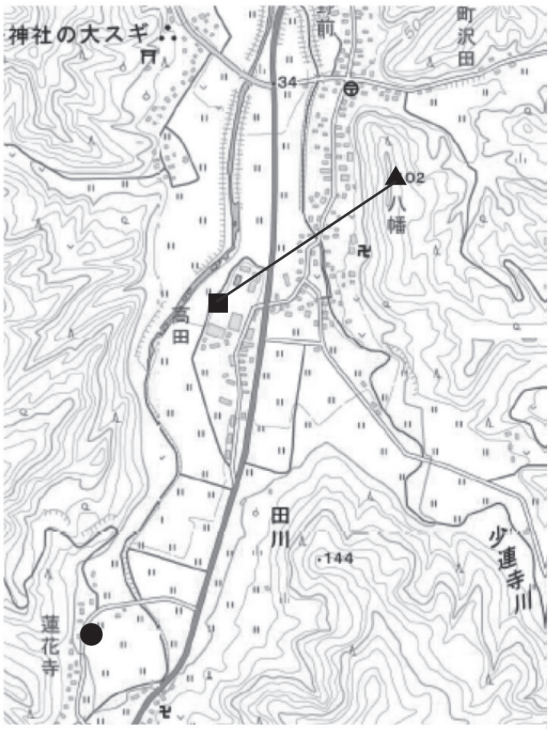
田川館は50m四方の堀に囲まれた不整方形の区画を持つ館と推定されている。田川地区は日本海側の湊と出羽国側とをつなぐ街道の要衝に位置する。

●寺院　田河館の南西方向に蓮華寺跡が位置するが、田川氏滅亡後の寺院と考えられている。

▲信仰対象の山　居館の東側の丘陵が信仰対象の山と推定される。七日台墳墓群があり、田川氏の歴代の廟的存在にあたる。さらに東方奥には金峰山が位置する。

・12世紀代と考えられる手づくねかわらけが３点出土している。

◎居館・墳墓群＝信仰対象の山は近接するが、同時代の寺院の存在が分かっていない。交通の要衝としての地形が軸となった配置とみられる。出土遺物など平泉との共通点は見られるが、空間構造として西方を意識した仏教的意識に基づく設計とは見てとれない。



凡例　■居館　●寺院　▲信仰対象の山

七日台墳墓群から田川館を望む

（２）新潟県　蒲原平野北部

① 新潟県胎内市中条　　居館○－寺院？－信仰対象の山○

■居館　下町・坊城遺跡（11～12世紀）・江上館跡（13世紀代）

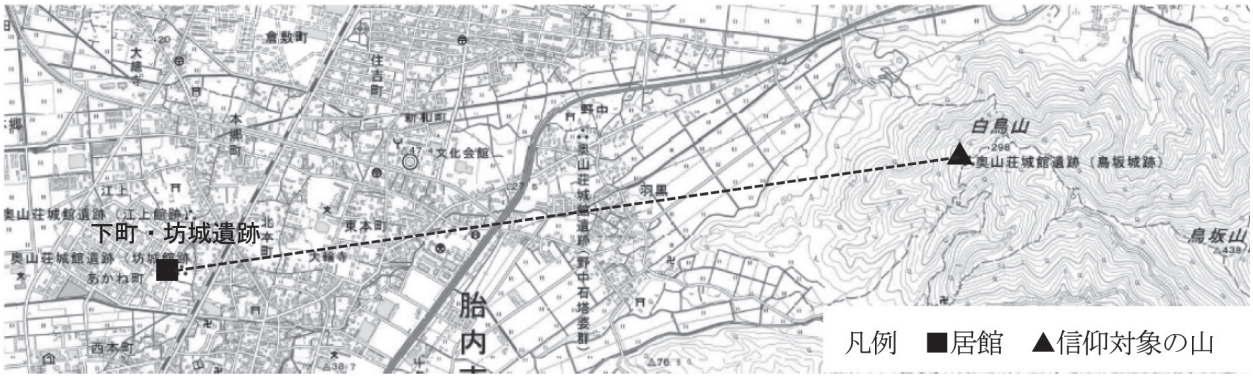
下町・坊城遺跡は奥山荘の政所と推測される遺跡であり、奥州藤原氏と勢力争いのあった城氏の居館と考えられる。江上館は城氏滅亡後、奥山荘惣領地頭となった中条氏の居館跡。両者は200mほどの距離にあり、下町・坊城遺跡から江上館に居館を移したとされる。

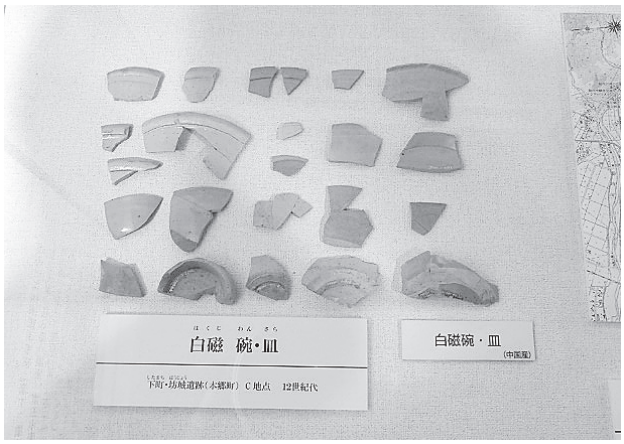
▲信仰対象の山　鳥坂山

奥州藤原氏滅亡後、城氏が最後に立てこもった山城として『吾妻鏡』にも記載。日常的には、居館からの眺望可能な信仰対象の山と考えられる。

・下町・坊城遺跡からは、かわらけ、中国産白磁、青磁がまとまって出土している。

◎居館と信仰対象の山は確認できるが、寺院については明らかになっていない。





下町・坊城遺跡出土品

②　阿賀野市水原・安田　居館○－寺院？－信仰対象の山○

■居館　大坪遺跡　11～12世紀

城氏の居館の「白河御館」と推定されている。

多数の輸入陶磁器が出土している。

▲信仰対象の山・経塚

横峯経塚・羽黒山

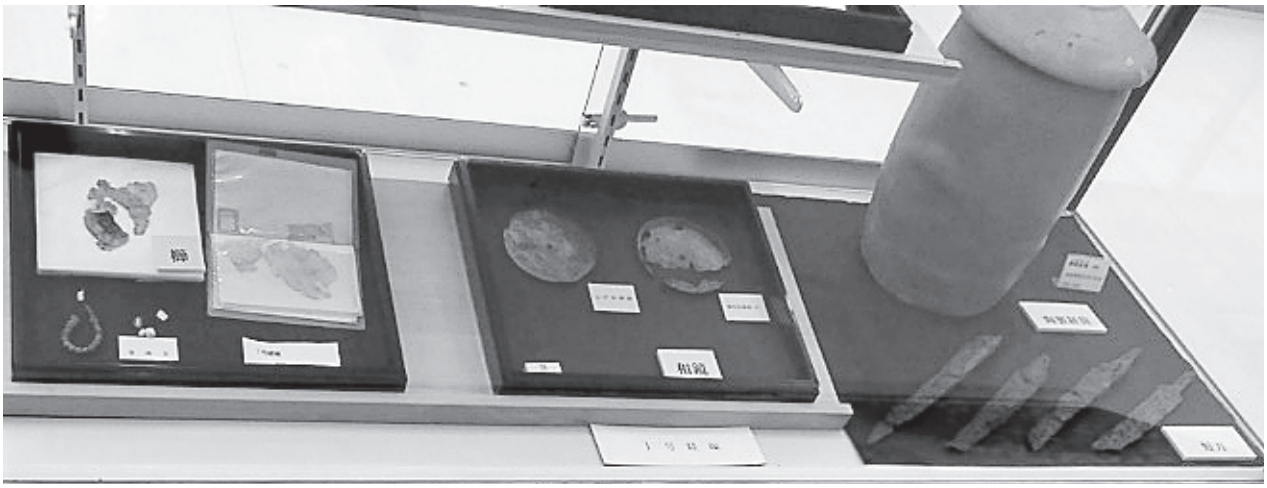
横峯経塚は12世紀に比定され、大坪遺跡の東方の「上野林」と称される丘陵に位置する。そのさらに東方に信仰対象の山と考えられる羽黒山が所在する。

●※寺院等の所在については不明だが、大坪遺跡西側に寺社という字がある

・出土遺物はかわらけが大半を占める。国産陶器のほかに高麗青磁の梅瓶など高級品の輸入品も多い。

◎居館と信仰対象の山は確認できるが、寺院については明らかになっていない。しかし、大坪遺跡西側に寺社という字があることから、寺院の存在の可能性がある。

大坪遺跡から横峯経塚方向を望む



横峯経塚からの出土品

（3）大分県　国東半島　　参　考

①田染荘（大分県豊後高田市）　居館△－寺院○－信仰対象の山○

■居館　尾崎屋敷　（荘官の屋敷）　宇佐神宮内に位置する弥勒寺の僧が「峯入り」とした修行のために各地域に拠点を築き、国東半島全体に布教が進んでいった。田染は宇佐神宮の荘園の一つであり、その集落の中心に荘官である尾崎屋敷が位置する。

●寺院　富貴寺、田染真木大堂など

田染地区の富貴寺は国東半島における浄土信仰のもと、平安末期の阿弥陀堂として唯一残っており、建物は国宝に指定されている。堂内に描かれた浄土変相図の園池は曲池になっている点は注目できる。また、現地での園池は南方の現在の駐車場付近に広がっていたと推定されている。

このほか、田染荘の南南東に国東半島六郷満山最大の寺院であった真木大堂（伝乗寺）がある。

▲信仰対象の山　西叡山、夕日岩屋・朝日岩屋　等

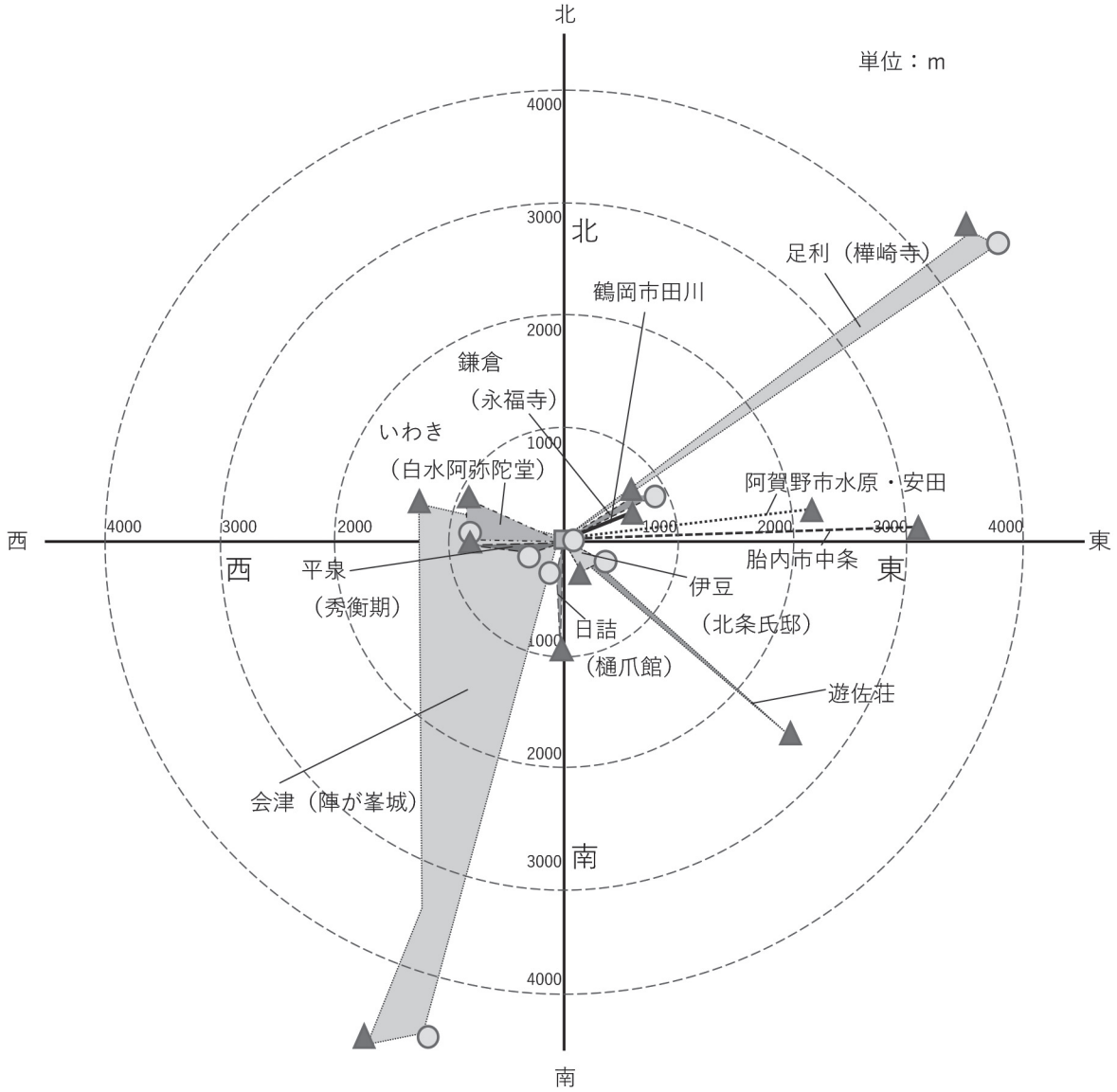
集落から眺望できる範囲の名勝や山を信仰対象としているケースが多く平泉とも共通する。

◎宇佐神宮または地域の仏教寺院が作り上げた村落の空間であり、在地領主または荘官の居館との関係性はあまり強くない。

夕日岩屋・朝日岩屋からの田染荘遠景
（正面の山は西叡山）

４　小結

以上の調査内容について、地域拠点を形成する３者の関係を、昨年度（東北・関東・東海地域）のグラフと重ね合わせてまとめてみる。居館■を中心に置き、寺院●、信仰対象の山▲を地図上で結び付けた三角形をグラフ上に表現したものが下のグラフである（田染荘を除く）。



昨年度の研究報告では、地域拠点を形成する「居館－寺院－信仰対象の山」の関係を、（１）近接して立地する場合、（２）寺院－信仰対象の山は近接するが、居館は遠距離に位置する場合、（３）それぞれが離れる場合の３つに分類した。今年度の事例について、上記３分類に当てはめていく。

（１）居館－寺院－信仰対象の山が近接して立地する事例

令和２年度報告では、秀衡期の平泉、紫波町日詰（樋爪氏）、静岡県伊豆の国市韮山（北条氏）の事例で挙げたものである。

今年度の事例では、庄内平野の遊佐荘、鶴岡市田川がこれに当てはまる。

遊佐荘は大楯遺跡において、居館－寺院（東西軸の仏堂、園池あり）が近接して立地している。鳥海山、大物忌神社（口ノ宮）の丘陵とも信仰対象になるが、一体的にはとらえにくい。

鶴岡市田川は、田河館遺跡が当てはまる。寺院域については不明であるが、居館と七日台墳墓群の丘陵が近接して立地している。

（２）寺院―信仰対象の山は近接するが、居館は遠距離に位置する事例

令和２年度報告では、いわき、足利、鎌倉の事例で挙げたものである。

胎内市中条は、（１）と（２）で判別が難しいが、下町・坊城遺跡が（２）の可能性がある。こちらも寺院域については不明であるが、居館と信仰対象の山は３㎞ほど離れているが、戦時に逃げ込むことは可能な距離である。

（３）居館、寺院、信仰対象の山がそれぞれ離れる事例

令和２年度報告では、会津の事例で挙げたものである。

今年度の事例では、阿賀野市水原・安田がこれに当てはまる。

大坪遺跡は、居館と推測される寺院域が500ｍ程度離れる。経塚のある丘陵地域も視認はできるものの、距離があり、ともに近接している立地ではないと考えられる。

上記のことから、奥州藤原氏との類似という観点で検討した場合、遊佐荘、鶴岡市田川、胎内市中条は類似点が指摘でき、阿賀野市水原・安田は類似性が弱いと推測される。

これがそのまま奥州藤原氏の影響力と関連するかはさらなる検討が必要だが、遊佐荘、鶴岡市田川地区が該当するとみなしうることは重要であろう。

そうした場合、共通点を探ることは難しくなるが、平泉との相違点として、遺物の多様さが際立っている。特に輸入陶磁器の量が圧倒的に多く、奥州藤原氏が交易の点で重要地域と考えていたことが推測できそうである。

今後も類例を整理し、比較研究を進めていくこととしたい。

【参考文献】（当該年度分）

・大道篤史・戸根貴之　2021 「研究報告１－２　東・北アジアにおける政治拠点と平泉の比較研究　奥州藤原氏の「拠点づくり」の考え方とその影響　－東日本地域を中心として－」『平泉文化研究年報』第21号
・遊佐町教育委員会　1991 『山形県飽海郡遊佐町　大楯遺跡　第３・４次発掘調査報告書』
・山口博之　2003 「遊佐荘大楯遺跡の成立」『研究紀要』創刊号　財団法人山形県埋蔵文化財センター
・中条町　1982 『中条町史　資料編第１巻 考古・古代・中世』
・水澤幸一　2006 『奥山荘城館遺跡　中世越後の荘園と館跡（日本の遺跡15)』 同成社
・新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団　2006 『一般国道49号　安田バイパス関係発掘報告書Ⅰ　大坪遺跡（新潟県埋蔵文化財調査報告書　第153集)』
・櫻井成昭　2005 『六郷山と田染荘遺跡　九州国東の寺院と荘園遺跡（日本の遺跡４)』 同成社
・入間田宣夫　2003 「中世東北の地域区分」『東北文化シンポジウム報告　いくつもの東北（東北文化の広場７)』 東北芸術工科大学東北文化研究センター
・羽柴直人　2011 「東日本初期武家政権の考古学的研究－平泉勢力圏の位置付けを中心に－」 総合研究大学院大学　博士論文

日本の学校教育における世界遺産の教材化についての研究
―2021（令和３）年度の調査・活動の報告―

土屋　直人（岩手大学）
田中　成行（岩手大学）
中村　孝（岩手県教育委員会）

はじめに

本稿は、昨年度より発足した、岩手県と岩手大学の「平泉学」共同研究における「テーマ２：日本の学校教育における世界遺産の教材化についての研究」の、本年度（2021・令和３年度）の調査・研究活動の展開と、その成果の一部について報告するものである。

本稿の前半部の第１章および第２章の部分を、岩手大学の土屋直人と岩手県教育委員会の中村孝が共同で執筆し、第３章の部分を、岩手大学の田中成行が執筆した。

１．「テーマ２」の研究体制、本年度の調査・研究活動の趣旨

岩手大学と県との共同研究計画（令和２年度～令和６年度）では、当初、主に以下の３つの研究目標を設定し、昨年度より調査研究を行ってきた。(1) 世界遺産教育の具体的な実践事例を収集する。(2) 世界遺産「平泉」における、よりよい世界遺産教育のあり方の検討と成果の実現を目指す（新たなデジタル教材の開発）。(3) 世界遺産の保存管理に係る理解の深化と、保存管理を担う若い世代の育成を目指す。

本年度も、昨年度に引き続き、「テーマ２：日本の学校教育における世界遺産の教材化についての研究」については、岩手県と岩手大学の共同研究として、両者から構成される研究部会（以下、「教育」部会）を組織し、調査・活動を行った。なお、共同研究に係る研究協力・助言者として、昨年度に引き続き５名の学校関係者に依頼し、以下の５名の諸氏に共同研究に参画いただいた。

本年度における、共同研究の担当者（「教育」部会の構成員）は、以下の通りである（敬称略）。

【岩手県教育委員会】
　生涯学習文化財課　文化財専門員　千葉 正彦（県立学校籍）
　生涯学習文化財課　文化財調査員　中村 孝（県立学校籍）
【岩手大学】
　平泉文化研究センター　教授　平原 英俊
　平泉文化研究センター　准教授　土屋 直人
　平泉文化研究センター　准教授　田中 成行
【協力委員】
　岩手県立平舘高等学校　副校長　熊谷 道仁
　一関市立大東小学校　副校長　千葉 憲一
　花巻市教育委員会教育部学校教育課主任指導主事兼指導係長　及川　仁
　紫波町立西の杜小学校　副校長　松田　薫
　盛岡市立上田中学校　主幹教諭　上田 淳悟

本年度は上記メンバーでの協議の部会を３回持ち（第１回：令和３年８月18日、第２回：令和４年１月６日、第３回：令和４年３月３日）、調査研究の方向性や方向を議論したほか、授業・教材開発について協議を行った。

第１回の部会では、昨年度実施したアンケートの分析結果について、再確認と協議を行い、その成果を踏まえながら、デジタル教材を作成する際の観点や内容、今後の調査研究における課題や方向などについて、検討した。分析結果により、義務教育の方が平泉について学習する機会が多いこと、県立学校だと年間指導計画に世界遺産学習する内容を組み込めていないため、ほとんどの学校で世界遺産に関する学習をする機会がないことが現状であること、などが確認された。その他、以下のような、現状認識についての意見や見解、今後の調査研究への展望についての意見などが出された。

・校種によっては、年間１時間は平泉学習の授業を試みても、年間指導計画に組み込める状況を作らないと難しいのではないか。
・現代の子どもたちは、大人世代とは違う学習法で育ってきた児童・生徒であり、子ども世代の新しい学習法に対して適切な授業モデルが必要である。
・誰でも、この教材を活用してこの流れで授業をすれば世界遺産授業ができるというモデルが必要ではないか。中学校・高校では、一つのパッケージ（授業モデル）によって授業ができる。授業の単元と結びついたパッケージ（授業モデル）を示したい。
・世界遺産を学ぶ上で、見学・体験が必要。実際に現地に行けないときに疑似体験したり、見学した後に復習する際に、追体験できるようなデジタル教材があれば良いのではないか。
・実際に教材を作成して、学校教育に取り入れるとなった場合、教育委員会の学校教育室と結びついて、教材や授業モデルを提示したい。
・現在、世界遺産に関する教材に対して必要を感じてくれない人に、アピールできるものをつくらないといけないのではないか。
・デジタル教材の中身については、教科横断型（社会と国語）のものや、探究活動（中学校でのフィールドワークなどで活用）できるものが良いのではないか。
・『ときめき平泉の文化遺産』の内容を、デジタル教材につなげていければ。
・デジタル教材を作成するにあたり、まず足場となる授業モデルが必要。授業を行うもの、受ける側が必要と考えるデジタル教材を知る必要がある。

そこで、今年度の調査・研究として取り組んでいく内容として、以下の諸点について協議をし、具体的に活動を展開していくこととした。

・実際にときめき平泉の文化遺産を活用した授業を研究者の熊谷道仁氏に行っていただき、授業後に生徒にアンケート調査を行う。研究協力者の先生方には、それぞれの校種で行う平泉の授業モデルについて内容を検討していただく。
・昨年度予定していたが実施が叶わなかった、一関第一高校・附属中学校の授業見学を行い、デジタル教材やICTを活用した授業等の見学を行い、ICT活用の現状と課題について中高現場の先生方に聴き取り調査を行う。
・国語の授業（古典：『奥の細道』等）の中で活用できるデジタル教材について、その前提となる古典文学の観点からの「平泉文化」の教材化の視点の検討を継続的に行う。（このことについては、先行的に第１回部会で、岩手大学教育学部国語科教育科の田中成行氏からの話題提起を得た。）

このように、第１回の「教育」部会での協議の中では、特に『ときめき平泉の文化遺産』などこれ

までの平泉学習の教材を活かし、デジタル機器を活用した世界遺産「平泉」の授業モデル・プランを確立することを今後の部会の研究の方向性とすること、等々の調査研究への展望が話し合われた。
かくして、本年度は、以下の３点を具体的な調査研究の目標・方向とし、各々の面から調査研究、協議を行った。以下に、実際の具体的な取組内容と、その展開の概要を記す。

① 授業実践を通じて、どの様な場面でデジタル教材を活用すると効果的かの検討を行った。具体的には、デジタル機器を活用した、世界遺産「平泉」を学ぶ一貫した授業プランの研究への足掛かりとして、研究協力者の熊谷道仁先生（平舘高等学校副校長）からご協力を頂けることになり、県立平舘高等学校での「平泉・世界遺産学習」プランとその実践を行った。この研究協力者・熊谷道仁先生や関係の諸先生方のご提起による、オンライン中継の提案授業（研究授業）から、実際的な教材の提起をうけながら、今後もどのようなデジタル教材が必要か、また、どの様な場面で教材を活用すべきかなどについて、検討・協議を行った。

② ICT を活用した授業モデルの検討を行い、校種に応じた授業モデルを提案できないか検討を行うための、基礎的な実態調査を行う。この点については具体的には、ICT を活用した授業実践校である一関第一高等学校・附属中学校への授業視察の実態調査と、担当教諭らへのヒアリングを実施した。

③ 歴史学や歴史教育などの社会科教育の観点のみならず、文学史・古典文学などの文学教育、国語教育の観点からの教材開発について検討を進める。具体的には、第１回部会協議の場に続いて、第２回部会の協議の場において、上記の岩手大学・田中成行氏に、引き続き話題提起を頂き、国語教育や古典文学等の観点から、平泉文化への視座や教材化の視点などについて、部会メンバーで学習と協議を行った。（③について、２回の部会の中で、田中成行准教授から話題提起を得て、古典文学の観点からの教材づくりの視点などについて多角的に考察し、議論を行ったが、その研究内容については、後述の田中氏の執筆になる報告部分を、参照されたい。）

以下の第２章、及び第３章では、特に、上記の①と③に関わって、それぞれの調査・研究等の概要を記していきたい。

２．県立平舘高等学校における「世界遺産授業」の研究授業について

（１）平舘高校「世界遺産授業」の概要

以下、まず、平舘高校で実施した研究授業（提案授業）の趣旨、実施内容等を記す。

１　期　日　　令和３年10月１日（金）
２　場　所　　岩手県立平舘高校（八幡平市平舘25－６）、
　　柳之御所遺跡（平泉町平泉字柳御所地内）
３　趣　旨　　・上記の研究協力・助言者一人である平舘高等学校熊谷道仁副校長の協力のもと、柳之御所遺跡と教室をオンラインで結び、現地に行けなくとも実際の発掘現場での作業や、史跡をオンライン中継で見ることで、生徒の興味関心を引き出すことのできる授業を研究したい。
　　・「平泉」を題材とした授業モデルの研究と、生徒の目線から求められるデジタル教材について調査する。
４　対象生徒　　平舘高等学校２学年10名
　　・平舘高等学校の教育課程には日本史を選択履修している生徒がおらず、生徒は中

学校までの知識で授業を受ける。
・平泉に関する知識が少ない生徒やあまり関心のない生徒に対し、実際の現場ではどのような作業を行っているか、実際の映像を通じた体験を通じて興味関心を持たせたい。

5　授業手法　①平舘高等学校に設置されている単焦点プロジェクター、電子黒板を活用して、授業者と生徒の双方向の授業を行う。
②平泉や遺跡の発掘調査について生徒からの疑問点を集約し、オンライン中継で北村文化財専門員に解説してもらう。
③柳之御所遺跡公園や現在調査中の現場の様子を中継することで、授業にライブ感を出させ、イメージしていたものと実際のものを比較することで思考を深めたい。

6　授業者　熊谷道仁（平舘高等学校副校長：学校で授業を行う）
作山達彦（岩谷堂高等学校教諭：中継協力者。昨年度平舘高等学校勤務）
北村忠昭（文化財専門員：平泉にて生徒からの質問に答える）
中村孝（柳之御所遺跡担当：中継のカメラマン）

（2）平舘高校「世界遺産」授業の学習指導案

次に、平舘高等学校における「世界遺産」授業の学習指導案（略案）を以下に示す。

＊＊

世界遺産授業学習指導案

日　時　令和３年10月１日（金）３校時
対　象　普通科２年生10名
場　所　岩手県立平舘高等学校
教　材　『ときめき平泉の文化遺産』

１．単元名　世界遺産『平泉』について学ぶ

２．単元目標
・平泉の持つ文化遺産の価値について学び、現存する建物だけでなく、地下に埋もれている文化遺産も価値があることに気づかせる。
・実際に現地に行けない状況下の中で、オンライン中継やインターネットなどデジタル機器や動画などを活用して、興味関心を持たせる工夫を探る。
・世界遺産の追加登録に向けて、現在も発掘調査を行っている遺跡があることについて学ぶ。（本時では柳之御所遺跡を中心に据えて授業をする）

３．生徒の状況
・日本史選択者ではないため、平泉についての学習は中学校までの内容で終わっている生徒たちである。

４．指導計画　世界遺産授業（１時間）　本時

５．本時のねらい
・オンライン中継により、実際調査を行っている文化財専門員から、出土した遺物や遺構の解説や生徒が疑問に思った点を質問させ、理解を深めさせる。

・ICT を活用した方法とオンライン中継や本物の遺物に触れる活動などを組み合わせることで生徒の興味関心を持たせたい。

6．本時の指導過程（50分授業）

【評価の観点】 関心・意欲・態度　A　　思考・判断・表現　B
知識・理解　C　　資料活用の技能　D

	学習内容	学習活動	指導上の留意点
導入5分	・世界遺産に登録されている平泉の文化遺産について知ろう 目当て：柳之御所遺跡のもつ文化財の価値は何か	・平泉の世界遺産の構成資産の他にも文化遺産があることについて映像を通じて学ぶ	・映像（自主撮影）の他、自分のいる学校と平泉の位置関係をデジタル地図を活用してつかませる。 D ・平泉の文化遺産には、寺院だけでなく、地下に埋もれた遺跡も多いことに気づかせる。 C
展開35分	・奥州藤原氏について ・仏国土について ・柳之御所遺跡について ・発掘の現場の動画（録画）を見る 発掘調査現場と中継を結ぶ（１回目） ・発掘調査についての説明 ・生徒からの質問 発掘調査現場と中継を結ぶ（２回目）	・藤原氏と奥州の歴史について、全体像をつかませる。 ・chromebook で生徒に調べさせる ・平泉から見つかる遺構や遺物にはどのようなものがあるか学ぶ ・実際の現場ではどのような調査活動を行っているか、どんなものが出土したかを中継の映像を通じて学ぶ。 ・今年の調査の成果についてや、これまで調査で分かったことについて、文化財専門員からの解説を聞く。 ・発掘について疑問に思うことなどを、文化財専門員に質問して学びを深めさせる。	・『ときめき平泉の文化遺産』を活用し説明する。 C B ・柳之御所遺跡の場所を平泉の他の文化遺産も含めて地図を活用して確認させる。 D ・現場の発掘の様子を紹介 ・発掘現場からのライブ映像の他、写真や教室にあるかわらけの実物を活用する。 A ・柳之御所遺跡の発掘調査を通じてどのようなことが分かったのか、実際調査を行っている人の言葉で生徒に伝える。 A ・教室と柳之御所遺跡をオンライン中継で結び、考古学という学問について関心を持たせる。 A
まとめ10分	・本時のまとめ まとめ：日本の歴史を探る上で重要な歴史であるといえる	・建物だけでなく、地下に埋もれた遺跡の持つ価値について復習する。 ・歴史へ関心を抱く。	・骨寺荘園遺跡や達谷窟、白鳥舘遺跡など、柳之御所遺跡と同様に発掘調査を行っている遺跡があることを確認させる。 C ・歴史への好奇心について、実体験を語る。

＊＊＊

＊上記の学習指導案の授業構想は、直接には、平舘高等学校の熊谷道仁氏（平舘高等学校副校長）と中村孝氏（岩手県教育委員会生涯学習文化財課）の協議の中でつくられたものである。

＊当日の実際の授業には部会の複数名が参観に加わるほか、複数名の部会メンバーはリモート配信により遠隔参観を行った。

（３）授業構想の背景、実際の授業展開（要点）

・研究協力・助言者一人である平舘高等学校熊谷道仁副校長の協力を得て、柳之御所遺跡と教室をオンラインで結び、オンライン中継を通して、生徒の興味関心を引き出し得た授業となった。
・当日、授業に参加してくださったのは２年生10名。日本史を選択していない生徒であり、生徒は中学校までの知識で授業を受ける状況であった。また、熊谷先生が副校長であり普段授業を担当していないという状況で、ふだん生徒たちとのコミュニケーションがあまりとれていない状況のなかで、どういう授業をすれば「わかった」「すごい」と思ってもらえるか、そこを考えながら、学習指導案を作ってきた。
・柳之御所遺跡の関係の皆さんの協力を得て、柳之御所遺跡とのオンライン中継により、実際調査を行っている文化財専門員から、出土した遺物や遺構の解説などを盛り込んだ。
・今回の授業で、用意した教材は『ときめき平泉の文化遺産』というパンフレット。これを、実物投影機をモニターに提示しながら、用いてゆく授業を構想した。
・実際にデジタル機器を用いて、授業の「めあて」を明らかにする動画、平泉の世界遺産を紹介する動画を作成し、それらを適宜活用しながら、授業を進めた。
・まず、〈導入〉の５分間では、私たちが作成・準備しておいた、本時の「ねらい」を明らかにする動画と、平泉の構成資産、拡張登録をめざしている資産について紹介する動画を流して進めた。しかし、ただ映像を「流しっぱなし」にしていては、何をやっているのかわからなくなってしまうということになるので、教室の授業者の熊谷先生は、一つひとつの場面で画像を止めながら、授業の内容を確認しながら進んでいくように、工夫をした。
・次に、〈展開〉の場面では、県では一人一台パソコンが使えるようになっているので、皆で「仏国土」というテーマについて調べてみようということで、実際にデジタル機器を使って、自分たちで調べるという活動を取り入れた。
・その後、平泉の柳之御所遺跡の今年度第83次発掘調査で発見された「かわらけだまり」の映像・動画を皆で見て、実際に「かわらけ」の実物を見て、手で触ってみて、また北村専門員の解説を聞いてと、五感を駆使して、わかりやすく授業をできないかと工夫して、進めていった。
・モニター・スクリーンの配置については、黒板に向かって、中心にあるのが主に動画やオンライン中継映像を映すための、単焦点のプロジェクターとスクリーン。右側に『ときめき平泉の文化遺産』を映す実物投影機（書画カメラ）を用意し、それを映すプロジェクター。右側は、検索用パソコンと、パソコンで検索したものを示すプロジェクター。
・発掘現場と中継で結んで「かわらけ」等を見せたかったが、当日は降雨であり、発掘現場の状況にはブルーシートが被せられている状況であったので、実際には、遺物の洗浄作業をしているプレハブと中継して、北村専門員からの解説と、生徒からの質問のやりとりをし、交流をして、理解を深める時間にするというように、当日に切り替えた。教室にサポートに入ってくれた先生の協力により、生徒と北村専門員とのやりとりも無事円滑に行われた。

（４）第2回「教育」部会での、平舘高校研究授業の振り返り】（感想、意見等）

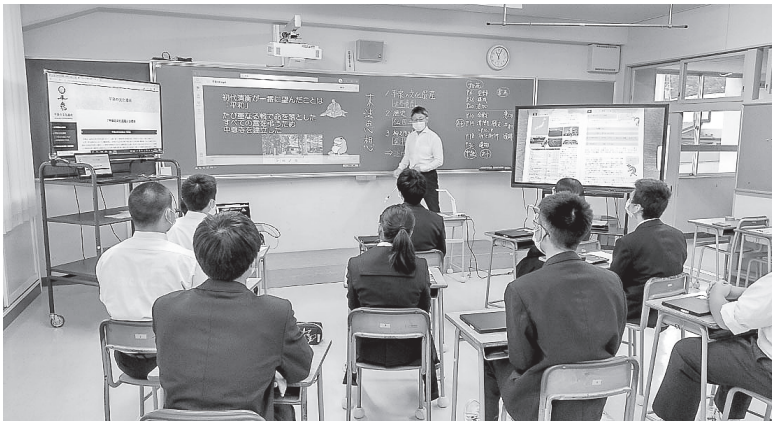
〇熊谷道仁先生の感想等

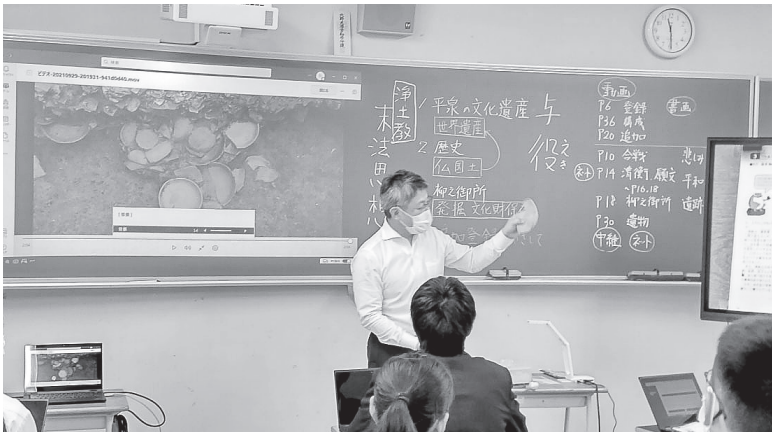
・柳之御所をテーマに据えて授業の準備をはじめた。→動画を用意し、俯瞰した内容からテーマを絞りながら授業を進めた。
・単焦点のプロジェクタ、電子黒板、書画カメラを用意し、平舘高校教諭の鈴木先生のサポートによ

り、中継やパワーポイントの切り替えを行っていただき、スムーズに授業を進められることができた。
・課題として、３時間程度授業時間を用意する必要があった。また、マスコミに情報発信してもよかったのではないか。

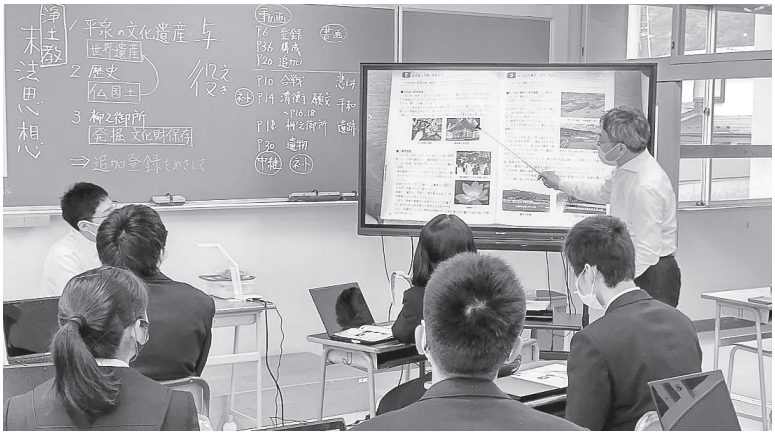
〇オンラインで参観の各先生方の感想等
・ICT 機器の使い方が大事。出前授業を行うなどの際にも、機器をスムーズに使えるかが大切。慣れていないうちは生徒もタブレットを起動するだけでも苦労する。先生方にも、デジタル機器を授業で使うことにアレルギーを示す方もいる。→どうすれば簡単に使えるかということが大事になる。
・オンライン中継の可能性は大きい。授業の中で何を焦点化するかが重要になる。→児童・生徒に伝えるときに、感動するテーマを中心に据えて授業を行いたい。
・テレビ局でしかできなかったことが、我々でもできるようになった。→もっと博物館と教室を結ぶようなことができるのではないか。
・45分の授業の中で全部ではなく、10～15分程度のコンテンツをいっぱい用意するのはどうか。テーマごとにコンテンツをつくる。
・簡潔にコンパクトに授業をまとめていた。段取りを丁寧に考えてくれて、中継も良かった。
・10～15分程度でテーマごとにコンテンツをつくり、中継も交えて専門学芸員に説明してもらうことが授業でできれば良いのではないか。
・テーマごとのコンテンツをあつめたもので、将来的にデジタル博物館のようなものに発展できるのではないか。

平舘高校「世界遺産」授業（研究授業）の様子




平泉の文化遺産
世界遺産
歴史
仏国土
柳之御所
発掘 文化財保存
⇒追加登録をめざして

平泉の文化遺産
世界遺産
歴史
仏国土
柳之御所
発掘 文化財保存
⇒追加登録をめざして


平泉の文化遺産
世界遺産
歴史
仏国土
柳之御所
発掘 文化財保存
⇒追加登録をめざして

古典文学定番教材『おくのほそ道』の「平泉」の魅力を 随行記『曾良旅日記』との比較で読み取り 読者が「一人の旅人」「一人の作者」として自覚し今を表現するために

岩手大学　教育学部　田中成行

はじめ

中学校国語科３学年の古典の定番教材である松尾芭蕉作『おくのほそ道』。その古典文学作品の紀行文としての価値と魅力を、すべての教科書に掲載されている「平泉」章に焦点をしぼり、一語一語の具体的な言葉の表現に注目し、元になった旅の記録『曾良旅日記』（『曾良随行記』）との比較、引用された杜甫の『春望』の「本歌取り」の効果、能の用語や構成との関わり等から味わいたい。そして同時に、ICT を活用した CG（コンピューターグラフィックス（コンピュータを使用した図形、画像などの表示技術））等によるバーチャル（仮想的）な再現画像によるイメージ化をも生かしつつ、最終的には現地に自ら訪れ、「一人の旅人」「一人の作者」として本物を自ら実感して学び合い、言葉を通して追究する教材実践を提案したい。

１　文学作品と記録との違いを実感するために

現在教育現場で進められている ICT 活用によるＣＧ等を駆使しつつも、それに頼り切らず、まず「作者の工夫」が凝らされた原文の言葉の表現の一つ一つをしっかり受け止め、一人一人の生徒自身の想像力と創造力を生かす教材創りを目指したい。

そのために、芭蕉に同行した弟子の曾良（そら）の、『曾良随行日記』または『曾良旅日記』と呼ばれる、旅の事実の記録と、『おくのほそ道』という紀行文の古典文学作品との、比較によってその違いに注目し文学作品としての独自の魅力を実感し合いたい。

まず、実際の「平泉」の現地の場面の CG による再現を、藤原泰衡（やすひら）や源義経の滅びる以前の頃、500年後の芭蕉の頃、そして現在の３期に分けて行いたい。

奥州藤原氏が滅びる前や、芭蕉の頃は CG によって、現在はドローンでの撮影やナビゲーションシステムによる最新情報を活用して今の様子を再現し、実際に自分もそこに「旅人」として立って歩きたいと思えるようにしたい。バーチャルがリアルであればあるほど、もう行かなくてもいいと思うのではなく、本物を直に見たい、現地に行きたいと思うものである。

芭蕉という作者によって、文学作品として創造し生み出された、『おくのほそ道』という作品世界の魅力を、具体的な「作者の工夫」に注目しつつ追究し合いたい。

それは歴史と地理や、文学などの、教科横断的な総合的な学びの実践でもある。

筆者が二十数年務めた東京学芸大学附属小金井中学校の修学旅行は、各学年で実施され、1学年は北総常南の千葉・茨城にある農家、魚市場、醤油工場、製鉄所、成田山新勝寺と門前商店街等で社会科中心に働く人々を学び合い、２学年は秩父・長瀞で理科中心に岩石や化石採集をしながら地球との対話をして地球の成り立ちを学び合う。そして３年生では、美術科・国語科・社会科が中心となって、「人と文化」という共通テーマで、明日香・奈良・京都を訪れ、今までの学び合いの成果を生かした実践の総まとめとして、実際に訪ねる現地にゆかりの人物や、建築物、仏像、『万葉集』等、自分が最も興味・関心のあるテーマを選び、テーマ毎の班に分かれて自主的に事前学習を行い、現地でも班毎に計画を立てて各自最も行きたい所、見たいことを、喧嘩をするほど徹底的に相談して決定

し、わくわくして現地を訪ね、本物に出逢い心から感動する姿が見られるのである。また、３年生は５月に修学旅行があるため、３学年で学ぶ『万葉集』を２学年の後期に学ぶ等、カリキュラムマネジメントとして実態に即した柔軟なカリキュラムが実施された。そして、本物の天の香久山を目前にしたある生徒は、『風土記』に記された天から降った天に通じる神聖な山というイメージを踏まえつつ、『万葉集』２番歌の国見歌の「国原波　煙立龍　海原波　加萬目立多都（国土には炊煙が龍のように立ち昇り、海面にはカモメが都の人々のように多く飛び交っている）」や、13番歌の恋争いの大和三山歌で「高山波」と万葉仮名で表記されていることを思い出しつつ、数字の記録としては標高は150m足らずだけれども、「うわ大きいなあ」と本物の実感を語った。

「自分事」として真剣に事前学習に取り組み学び合ったからこその感動であり、ジグゾー法のように、自分のこだわりを持ったテーマ毎で本物に出逢い深まった研究成果を伝え合う事後学習の発表会は、すべての教科が密接に関わり合いつながっていると実感し合える実に豊かな学び合いとなった。「平泉」でもこのような本物に出逢う学び合いの実践を提案したい。

作者である芭蕉は、「平泉」の旅の事実の中から、何に注目し、何を捨てて、何を取り出し組み合わせて『おくのほそ道』という文学作品として結晶化したのか。

歌人俵万智の短歌の創作時の例を参考にしてみよう。

〽「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日

は、短歌の創作時の素材となった体験があり、「君」に褒められたのが「カレー味のから揚げ」だったというのが「現実」だったが、二人の恋のイメージという「真実」を表現するために、添えた新鮮な「サラダ」としたという。（『短歌をよむ』岩波新書、1993年）

「現実よりも真実を」という、この文学創作の姿勢は芭蕉とも重なるといえよう。

さらに古典文学は、時代の独自の価値観、いわゆる独自性を踏まえることが大切である。その第一は旧暦と新暦、月の満ち欠けを基にする太陰暦と、太陽の運行を基にする太陽暦の違いである。例えば、新暦の７月７日の七夕は、曇りや雨が多く、七夕の短冊に願い事を書いた子どもたちを悲しませることが多いのだが、それは新暦の梅雨時であるからで、江戸時代までの昔の人々が見た旧暦の七夕は、プラス30日から50日の８月の真夏であり星もよく見えたのであり、仙台の七夕祭りが旧暦と同じ今の８月に実施されることに注目して旧暦で古典を読むことを徹底させたい。

芭蕉の平泉の旅も、旧暦の５月であり、新暦の６月の梅雨の頃であったことを確認したい。

また、俳句と俳諧の違いも確認したい。はじめは平安時代貴族の上品で雅な言葉を使う和歌の短歌の上の句五七五と下の句七七を二人で唱和する短連歌（たんれんが）があったが、後に複数の心通う仲間である連衆（れんじゅ）と交互につけ合う長連歌（ちょうれんが）が流行し、その最初の五七五の句を発句（ほっく）と言った。その連歌の言葉を、俗語や話し言葉や滑稽な言葉など自由に使ってよい「俳諧（はいかい）の連歌」が庶民に流行し、全国に広まった。その基盤が全国にあるからこそ芭蕉の旅も各地で支えられたと言えよう。「俳諧」とは滑稽、可笑しさ、ユーモアの意味があり、貴族的な上品で気取った言葉ではなく、身近な自由な言葉を使うことが大きな魅力となった。その「俳諧の連歌の発句」を独立した世界最小の詩として認識し「俳諧」の「俳」と「発句」の「句」を合わせて「俳句」として広めたのが明治時代の正岡子規であるとされている。その「俳句」の季節を表す「季語」も、本来は、心通う仲間が集まった時を記念し挨拶として最初の発句に入れるようになったと考えられるが、今では学校教育の現場で、絶対入れるように指導することが多い。しかし、本来は感動が先であって、それをよりよく伝える有効な方法、手段の一つ

として「季語」を学びたい。それゆえ芭蕉の句あるいは芭蕉の「俳諧」と言った場合「俳諧の連歌の発句」であることが多く、その発句の後に続く連衆の心が秘められていると考えられよう。さらに、本来の和歌である短歌の上の句にあたるのが俳諧の発句であるから、その和歌とは何かを知ることも大切であると言えよう。その答えの一つ、考えの一つが905年に成立した紀貫之によって書かれたとされる『古今和歌集』の「仮名序」の「やまと歌は人の心を種として万(よろづ)の言(こと)の葉(は)とぞなれりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて言い出せるなり。…」によって示され芭蕉を含めた後世の詩人、歌人たちに共感され今に伝えられてきた。「詩とは、歌とは何か」との問いに対する「歌によってこそ人の心は表現される」という一つの答えとして参考にしたい。また「俳句」に似た「川柳(せんりゅう)」も連歌の練習から発展し、「前句付け」といって七七を先に提示してそれに五七五を付ける形式で、例えば「座りこそすれ座りこそすれ」に「寝ていても団扇(うちわ)の動く親心」となり、居眠りしながらも幼子を団扇であおぎ続けるお母さんのユーモラスな親心の姿を描く。発句がないので自ずから季語を入れなくてもよいようになったが、原点は同じ俳諧の連歌である。

では平泉の旅の文学としての「真実」とは何か。芭蕉の真実があり、旅人一人一人の真実がある。

つまり『曾良旅日記』による芭蕉に曾良が同行した、芭蕉四十六歳の元禄二（一六八九）年三月から九月までの、約一五〇日間、北関東、東北、北陸地方の約二四〇〇kmの旅の記録の中の、平泉に滞在したとされる、旧暦五月十三日（新暦六月二十九日）の、午前九時頃から、午後四時頃に一関に帰着する間の三、四時間の体験をもとにして、『おくのほそ道』という文学作品に、どのようにして結晶化したのかを追究するのである。

２　記録としての『曾良随行日記』（『曾良旅日記』）

『曾良随行日記』（『曾良旅日記』）（『新版　おくのほそ道』尾形仂、角川ソフィア文庫、2003年）

三リ　長根町トモ
一（五月）十二日　曇、戸今を立。上沼新田町、安久津松嶋ゟ(より)此迄両人共ニ歩行、雨強降ル。馬ニ乗。
一リ　三リ　皆山坂也。　雨降出ル
加沢、一ノ関黄昏ニ着。合羽モトヲル也。宿ス。一リ　壱リ半　伊沢八幡壱り余り奥也
一（五月）十三日　天気明。巳ノ尅ヨリ平泉へ趣(おもむく)。山ノ目、平泉へ以上弐里半ト云ヘドモ
別当案内
弐リニ近シ。高館・衣川・衣ノ関・中尊寺・光堂・泉城・さくら川・さくら山・秀平やしき等を見ル。
金色寺
泉城ヨリ西
霧山見ゆルト云ヘドモ見ヘズ。タツコクが岩ヤへ不行(ゆかず)。三十町有由。
月山・白山ヲ見ル。経堂ハ別当留守ニテ不開(あかず)。金鶏山見ル。
シミン[ママ]堂无量劫院跡見、申ノ上尅帰ル。主(あるじ)、水風呂敷[ママ]ヲシテ待。宿ス。

とあり、午前九時頃に一関を出発し、平泉まで二里半約十キロと言われるが八キロ程と言い午後四時頃に一関に帰っている。

つまり、平泉には三、四時間程滞在したことになる。

『曾良旅日記』に記され、実際に訪れて見たり、訪れようとした場所は、以下のとおりである。（「・」は実際に行ったり見たりした所「＊」は実際には見られなかった所）

・高館（源義経の居館の跡と伝えられる）…①
・衣川…②
・衣の関（歌枕、中尊寺の入口の月見坂か）…③
・中尊寺…④
・光堂…⑤
・泉城（中尊寺の西北十町、三代藤原秀衡（ひでひら）の三男忠衡（ただひら）・和泉三郎（いづみのさぶらう）の居城跡）…⑥

芭蕉は「塩竈」で、塩竈神社に奉納された宝燈を見つけ、「神前に古き法灯あり。鉄の扉の表に」と、鉄の扉の文字が「文治三年（1187）和泉三郎寄進」とあるのを読みとる。5月8日の同日の、塩竈に着く直前に訪れた宮城県の多賀城跡の「壺（つぼ）の碑（いしぶみ）」で、その碑文を見て、

「昔より詠み置ける歌枕、多く語り伝ふといへども、山崩れ川流れて道あらたまり、石は埋もれて土にかくれ、木は老いて若木にかはれば、時移り代変じてその跡たしかならぬ事のみを、ここに至りて疑いなき千載の記念（かたみ）、今眼前に古人の心を閲（けみ）す。行脚の一徳、存命の悦び、羇旅の労を忘れて泪（なみだ）も落つるばかりなり。」

と、自然も人も変わりゆく中で、変わらず残り古人の心を伝える文字の力に感動して宣言し、杜甫の『春望』にある家書（家族の手紙）の離れた家族の心を伝える文字の尊さにも通じる、文字の力を実感する。そして芭蕉は、「平泉」において、

「五百年来の俤（おもかげ）、今目の前に浮かびて、そぞろに珍し。かれは勇義忠孝の士なり。佳命（名）今に至りて慕はずといふことなし。まことに「人よく道を勧め、義を守るべし。名もまたこれに従ふ」といへり。」

と、父秀衡の教えを守り義経を支持して、兄泰衡に二年後討たれた和泉三郎を称える。

・さくら川（歌枕、高館と中尊寺の間）…⑦
・さくら山（束稲（たばしね）山）…⑧
・秀平（衡）やしき（秀衡の没した伽羅御所跡か）…⑨
＊露山（曾良は「泉城より西」と記しつつも「見えるというけれど見えない」と記す。）…⑩
＊タツコクが岩ヤ（達谷ヶ窟は三十町（三キロ）あるので「行かなかった」と記す。）…⑪
・月山（神社）…⑫
・白山（神社）…⑬
＊経堂（別当が留守なので「開かなかった」又は「開けなかった」と記す。つまり入っていない）…⑭
・金鶏山…⑮
・シミン堂无量劫院（新御堂無量光院）跡…⑯

以上の順に記されている。

この具体的に記録された16か所の中から、作者の芭蕉はどこを選び、どこに焦点を絞って『おくのほそ道』という文学作品に結晶化したのかを読み取ってゆきたい。

３　『おくのほそ道』の素材や原型としての能

能とは、室町時代に猿楽（申楽）とも呼ばれた芸能であり、役者であり作者でもあった大和猿楽の観阿弥・世阿弥親子等によって完成された歌舞劇であり、現代も上演され続ける古典ミュージカルである。足利三代将軍義満以後の各将軍や、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康などにも愛好され、秀吉は自らをシテ（主人公）とした太閤能を自ら演じたりもしている。江戸時代には武士は武家のたしなみとして能を習うことが必修の教養とされ、さらに町人、農民等身分を越えて感動を生み広く全国に広まった。その能（能楽）の詞章（劇の文章・言葉）を「謡曲（ようきょく）」といい、芭蕉の作品の中にもたびたび引用されている。

能の典型的な構成に「夢幻能」がある。ワキの「諸国一見の旅の僧」が廃墟や遺跡や謂れのある場所を訪ねて行き、思いやり経を読み供養をしていると、夢や幻に、前場（ぜんば）では所の者として化身で現れたシテ（主人公）がこの場所の由来や伝説を物語り、後場では「実は私は」と亡霊や精霊の正体を現し、この場所で生きた一番の思い出を再現して見せて、旅の僧の供養を感謝して夜明けと共に消えていく。一方、旅の僧が登場せず夢も見ないで現実の出来事を演ずる「現在能」もあるが、観客が舞台に足を運び、橋掛かりという舞台と楽屋をつなぐ橋から幕を挙げてシテが渡って登場するのをじっと待ち鑑賞するのは、夢幻能の一つの発展形、応用形ともいえよう。「諸国一見の僧」のような「芭蕉たち」とおぼしき「旅人たち」が「高館の跡」を訪れ眺めそしてそこに生きた人々を思いやり、夢や幻の中で、そこに生きた者の亡霊と語り合うような「一見」を、『おくのほそ道』という作品の素材として、どのように描かれているのかを読み取りたい。山本唯一氏は『芭蕉の詩想』「高館の幻想」（和泉書院、1986年）で、芭蕉は夢幻能の趣向で「夏草や」「卯の花に」の二句が詠まれていると主張されているが、大いに共感するものである。

芭蕉は、貞享４年（1687）10月江戸から、奈良、明石等7か月の旅をもとにした俳諧紀行文『笈（おい）の小文（こぶみ）』で、俳諧への決意を、

「つゐに無能無芸にして只此一筋に繋る。西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における利休が茶における、其貫道するものは一（いつ）なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時（しいじ）を友とす。」

と記し、西行の和歌、宗祇の連歌、雪舟の絵、利休の茶と、各文芸や芸道、芸術アートの達人の名をあげ、貫くものは同じだと言い、自然にしたがい四季を尊び、「芭蕉の俳諧における」となる俳諧に一途に取り組む覚悟を示している。能では「世阿弥の能における」となろうか。
その覚悟で、「神無月（陰暦10月）の初、空定めなきけしき、身は風葉の行末なき心地して、

旅人と我名よばれん初時雨　　」

と、「旅人と呼ばれたい」と宣言して旅立っている。
この「旅人」は、一般の旅行者というよりも、例えば能「巴」で、芭蕉が生前慕い墓所も同じ義仲寺に置いた木曽義仲の、妻の巴御前の霊の化身に、旅の僧が、

「…拝み給へや旅人よ」

と呼びかけられたような、遺跡にゆかりの亡霊や精霊にも呼びかけられる「旅人」であっただろう。

４　『おくのほそ道』の本文を読む

紀行文『おくのほそ道』は、中学校三学年の古典作品の定番教材である。国語科教科書の四社の全てに、「平泉」の章が掲載されている。光村図書の中学校三学年教科書「国語３」によると、

三代の栄耀一睡のうちにして、
大門の跡は一里こなたにあり。　…①
秀衡が跡は田野になりて、　…②
金鶏山のみ形を残す。　…③
まづ、高館に登れば、　…④
北上川南部より流るる大河なり。　…⑤
衣川は、　…⑥
和泉が城をめぐりて、　…⑦
高館の下にて大河に落ち入る。　…（④⑤）
泰衡らが旧跡は、　…⑧
衣が関を隔てて　…⑨
南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。　…⑩
さても義臣すぐつてこの城に籠もり、　…④（高館）
功名一時の草むらとなる。
「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」…
（杜甫の、唐の都長安を舞台にした五言律詩『春望』の首聯の引用である。

その後の頷聯に続く頸聯において、戦乱で国が破れても変わらぬ山河や自然に対して、家族と別れた悲しみと家書（家族の手紙）の何物にも代え難い尊さを表す。

さらに最後の尾聯において、白頭（白髪）で愛する家族への心配と不安を表し、それは義経の妻の北の方の乳人として幼い頃から守り京都から支え続けて、義経と妻子の最期を見届けて討ち死にした十郎権頭兼房の白毛（白髪）と重なる。）
と笠打ち敷きて、時のうつるまで涙を落としはべりぬ。…④（高館）

夏草や兵どもが夢の跡

この句の「兵ども」は、芭蕉と俳諧の仲間にとって身近な文芸、芸能であり共有する教養でもある能（謡曲）の詞章によく使われた言葉でもある。

例えば、頼朝の命令で義経暗殺のために上京して返り討ちにあった土佐坊正尊を描いた能「正尊」の「兵ども皆武具をし」や、能「小袖曽我」の「東八箇国の兵ども」等と表現される身近な言葉であり、義経主従以外の「兵ども」をも表しているとも読めよう。

特に、芭蕉の慕った木曽義仲の登場する『平家物語』巻第七「願書」で、大勝利を収める倶利伽羅峠の決戦の直前に、埴生の八幡宮に木曽の書記の覚明が見事な願書を書き「あッぱれ文武二道の達者かなとぞ見えたりける。…（中略）…寿永二年五月十一日　源義仲敬白　と書いて、我身を始めて十三人が上矢の鏑をぬき、願書にとりぐして大菩薩の御宝殿にぞをさめける。…」を踏まえた『おくのほそ道』の旅の途中に福島県の須賀川で作ったとされる連句に、

梓弓矢の羽の露をかはかせて　素蘭
願書をよめる暁の声　芭蕉（『伊達衣』「かくれ家や歌仙」須賀川、栗斎草庵興行
（廣田二郎『芭蕉と古典－元禄時代―』明治書院、昭和62年）

とあり、「願書」と上矢の鏑つまり神に奉納した鏑矢の「矢」が詠まれていて、義仲が『おくのほそ道』の旅の途中もいつも心にあったことがうかがわれる。

芭蕉の活躍し『おくのほそ道』の旅をした元禄年間に上演された、義仲がシテ（主役）の能「木曽願書」では、覚明が願書を書き上げた後、

「今井樋口を始めとして。其数多き兵ども。皆悦びの色をなして。急ぎ社壇に参りつつ。…」

とあり、その後、シテの義仲自身が願書を読み上げ、

「…そもそも曾祖父前の陸奥守（源義家）。名を宗廟の氏族に帰附す。…（中略）…寿永二年五月日と。高らかに読み上ぐれば。義仲願書に鏑矢を、神前に捧げ申せば。御供の兵どもゝ。上差の鏑を一つづつ。彼宝前に捧げて。南無帰命頂礼。八幡大菩薩とて。皆礼拝を参らする。一声ワキ（今井兼平）寄せかくる。汀の波のおのづから。音も烈しき朝嵐。如何に平家の軍兵たしかに聞け。抑是は木曽殿の御内に。今井四郎兼平。今日追手の大将と名乗り呼ばるゝ其声は。天地も響くばかりなり。…」

と「兵ども」は度々使われ、元禄以後に改作された能「木曽」にも、シテの覚明が願書を高らかに「何々帰命頂礼八万大菩薩は…」と読み上げた後、

「木曽殿を初めとして。その座にありし兵ども。誠に文武の達者かなと。皆覚明をほめにけり。義仲上差抜き出だしこれを願書に取り添へて。内陣に納めよと…」

とある。この時の木曽義仲と義経は、その夢と野望を抱いた全盛の場面にも重なる。

また、「夏草」は、芭蕉が義仲寺で読んだ句「木曽の情雪や生えぬく春の草」の「春の草」にも照応するだろう。

卯(う)の花に兼房(かねふさ)見ゆる　白毛(しらが)かな　曾良

（初夏真っ白に咲き乱れる卯の花の白色と、『義経記(ぎけいき)』で義経の北の方の乳人であり、義経の臣下として、京都から義経と妻子の最期まで支えて奮戦した十郎権守兼房の白毛（白髪）の白が重なって見える）

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。　…⑪
経堂は三将の像を残し、　…⑪（１）
光堂は三代の棺（ひつぎ）を納め、　…⑪（２）
三尊の仏を安置す。
七宝散り失せて、玉の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、
既に頽廃(たいはい)空虚の草むらとなるべきを、
四面新たに囲みて、
甍(いらか)を覆ひて風雨を凌(しの)ぎ、

しばらく千載の記念とはなれり。
　五月雨の降り残してや光堂

とある。つまり曾良が『曾良旅日記』で16か所記録して挙げられた場所の中から、「高館」に絞り込まれ、義経主従や妻子の悲劇を思いやり甦らせ、ひいては義仲ら夏草のように激しく萌出でて茂り枯れていった様々な「兵ども」の生きざまをも浮かび上がらせ、そしてさらに、そこで滅びた人々の鎮魂のために心ある人々によって守られて残った「中尊寺」の「光堂」が、希望のともし火のように最後に「光堂」と詠み込まれて『おくのほそ道』の「平泉」の章は文学として結晶化するのである。

芭蕉が引用した唐の詩人杜甫の『春望』は従来中学二年で学び、既習内容として中学三年の『おくのほそ道』で活用されてきたが、今回の改訂版では四社のうち教育出版のみ『春望』等の漢詩を中学三年で学ぶこととなった。いずれにせよ、『春望』の家書（家族の手紙）や、深い愛情に裏打ちされた心配や悲しみによる白髪（「白頭」、兼房の「白毛」とも重なる）の意味の、正確な読解、理解による丁寧な深い学びを実践したい。

中学一年時の古典の定番教材『竹取物語』で、かぐや姫が月に帰らねばならぬとかなしみ泣くのに対して、自らも別れを受け入れがたく嘆いて泣く竹取の翁が、

「このことを嘆くに、鬚も白く、腰もかがまり、目もただれにけり。翁、今年は五十ばかりなりけれども、物思ひには、かた時になむ、老いになりにけると見ゆ。」

と描かれ、娘として大切に育てた愛するかぐや姫との別れを嘆き「鬚も白く」なることとも重なると言えよう。

５　「本歌取り」としての杜甫作『春望』

ここで「平泉」の章で引用される、唐の詩人杜甫の『春望』の効果を、従来の「国破れて山河在り、城春にして草木深し」の首聯を「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」として引用したその部分の意味とその効果を考えるだけでなく、尾聯の「白頭掻けば更に短く」をも、曾良の句「卯の花に兼房見ゆる白毛かな」と重なる表現として、「白頭」「白毛」つまり、「白髪」の、愛する家族や主君や最愛の人を思い心配や悲しさのあまり「白髪」となった「本歌取り」としての表現効果も、栄華を極めた中国唐の長安と日本の平泉の再現資料の比較と共に提案したい。

ここでまず、唐の都の長安と日本の都市の平泉の様子をCGでの比較で味わいたい。その時、古典における「独自性」と「普遍性」に注目したい。

つまり、中国の唐の都の長安における「城」がいわゆる城壁に囲まれた都市全体を表すのに対して、日本の都である平安京は城壁に囲まれておらず、「城」と言えば「泉が城」のように敵の来襲を防ぐための軍事的施設で、戦うための砦や要塞を表すという違いがありそこに独自性がある。しかし唐の国の都が破壊され、平泉の都市を守る城砦が攻め滅ぼされ廃墟となったのに対して、季節は廻り春となり夏となって自然の草木が芽生え繁るという普遍性は同じであることを実感し合いたい。

『春望』　　杜甫

国破れて　山河在り　　＊山河←遠景の自然の大きな眺め
（国が戦乱により平和や秩序が破壊されても、山河は変らずあり続ける）
城春にして　草木深し　＊草木→近景の自然の身近な植物

（城壁に囲まれた戦乱の都の中にも春が訪れ、草木は変らず生い茂る）
時に感じては　花にも涙をそそぎ　　＊花↓地で咲く
（戦乱による時勢の残酷な激変に心乱れ、花を見ても喜べず逆に涙し）
別れを恨んでは　鳥にも心を驚かす　＊鳥↑空へ飛ぶ
（家族との離別を恨み、鳥が飛び立つのにも恐れ見上れば）
烽火（ほうくわ）三月に連なり　　＊↑知らせ・白い烽火
（視線の先の見上げた空には、戦争を知らせる白い狼煙の煙が三か月もの間立ちのぼり続けている）
家書（かしょ）　万金（ばんきん）に抵（あ）たる＊↓知らせ・白い手紙（『春望』の後に作られた『得家書』（家族の手紙が着ついた）もある）
（知らせといえば、手元に安否を知らせてくれる、愛する家族の手紙の何とかけがえのないことか）
白頭　掻（か）けば更に短く　　＊→愛情の現れ・白髪
（その最愛の家族に何もしてやれぬ自分の無力さ不甲斐なさと不安で白髪となり、その白髪頭を掻けば掻くほど短くなり）
渾（す）べて簪（しん）に勝（た）へざらんと欲（ほつ）す　＊→役人の被る冠も止められぬ一本の小さな簪（かんざし）
（家族にとっての親や夫としてだけでなく、国の役人としての役目も果たせず、その印の冠止めの簪（かんざし）もさせぬ）

「遠くの山河から、破壊された都の中に茂る生命力溢れる草木に焦点が絞られ、地に咲く美しい花を見ても戦乱の不安ゆえにかえって涙が流れ、戦乱ゆえの愛する家族との別離を恨み不安にかられ、地面から鳥が空に飛び立っても戦闘かとおびえる。見上げたその大空には戦闘を知らせる白い狼煙がすでに三か月も立ちのぼり続けている。知らせと言えば、視線を手元に落とせば愛する家族からの安否を知らせる白い手紙が何物にも代えがたいと気づき、家族のかけがえのなさを知る。しかし今の自分には家族になにもしてあげられず不安と心配で白髪となり、掻けば掻くほど短くなり、父としても夫としても、国の役人としても何もできず、役人の冠を止める簪も刺さらぬほどだ。」

◎『曾良旅日記』では16か所ほど実際に訪れたり見たり、また訪れようとしたり見ようとしてできなかった所が記されているが、『おくのほそ道』は文学作品として11か所取捨選択して再構成され、さらに高館と光堂の二か所にしぼりこまれている。

藤原三代の栄華の跡は「大門の跡」と大きな門の跡から始まり、一里、約四キロにわたる三代秀衡の栄華の跡は、一面田野、田畑や野原となっていて、そこに金鶏山だけが昔のままの形でたたずむ。真っ先に義経主従がいたとされる高館に登り、北上川の大河を眺め、衣川が泉三郎のいた泉が城を巡って今登った高館の下の北上川の大河に落ち入るのを確認した。

四代の泰衡らが居た跡は、衣が関を隔てて、北の南部藩からの入り口を蝦夷から守っているようだ。

と眺めた後、「さても義臣すぐってこの城に籠り」と、能の「さても牛若は」「さても木曽殿は」等と同じように、話題を一気に今たたずむ「高館」という場に集中し、そこに秘められた義経主従と義経の妻子の最期の悲劇の籠城を語り、杜甫の詩『春望』「国破れて山河あり」を思い出し「笠うち敷きて時のうつるまで泪を落し侍りぬ」と感動の涙を流して詠んだ二句が、「夏草や」と、その後の曾良の「卯の花に兼房見ゆる白毛（しらが）かな」である。

この句の「兼房」とは、『義経記』巻第七で、義経が都落ちして陸奥へ下る時に、義経の北の方である久我の大臣の姫君の幼い頃からの養育係であった乳人である。「君の生まれさせ給ひて、三日にならせ給ひし時、兼房を召して、「この君をば善くも悪しくも兼房が計らひたるべし。汝に取らする」と仰せ候ひ蒙りしかば、やがて御産所へ参り候ひて、夜はめうふくの胸を御座と定め、昼は兼房が膝の上を御座とし参らせて、出仕の隙だにおぼつかなく、片時見参らせぬ時は、千代を過ぐる心地しておふしたて参らせ候ひて」と父大臣から生まれて三日目から養育を託されて大切に育て、「着たる白き直垂を、俄かに浄衣のごとく拵へて、白髪混じりの髻を解き乱して、これも兜巾をぞ着たりける。今年六十三にぞなりにける」とある、その六三歳になった十郎権守兼房が供を願い出て、京都から平泉まで同行し、「高館」での義経主従と義経の妻子の最期を見届けた。義経の妻を父代わりとして大切に守り育てた老武者である兼房の、長年の苦労と愛情の証の「白髪（毛）」である。

この「卯の花」の白と「白毛（髪）」の白は、『春望』の「時に感じては花にも涙を注ぎ」を受けた表現とも読め、「卯の花」の白で、さらに『春望』の「花」を「白い花」として、「白色」の連想の、「白い花」「白い狼煙」「白い家族の手紙」「白頭」という連鎖するイメージを補強する効果もあると言えよう。そして此処までは杜甫の『春望』の世界と重ねた「本歌取り」と言えよう。

「本歌取り」とは、読者と共有できる名作の表現を引用してその表現イメージを生かしつつ、「本歌」とは違う新たな表現世界を生み出すことが大切である。

では『おくのほそ道』はどのような工夫がなされているだろうか。

杜甫の『春望』では、戦乱の中で別れた家族に何もしてあげられない不安と心配と愛情を「白頭」の「白髪」で表し、「家書」の「家族からの手紙」によって家族のかけがえのなさがあぶりだされるが、芭蕉はそれを「本歌取り」しつつ、さらに『春望』にはない場面を描きこむ。それが「中尊寺」の場面である。

仏をまつる「中尊寺」の「経堂」と「光堂」が、朽ち果てて叢になるべきところを、滅びた人々への鎮魂や供養をする信仰や、ここに生きた人々に心を寄せる人々の心に支えられて、風雨を凌いで残っていることを詠み加える。「経堂」は事実としては開かず入れなかったが、「経堂」と「光堂」が「今」もあることが大切であった。その感動が「五月雨の降り残してや光堂」である。縦書きの文章の最期に、天から降る「五月雨」等の風雨にさらされながらもけなげにともる小さくはかないが、伝える人々の確かでたくましい希望のともし火のような心を「光堂」の体言止めの一語に結晶化して「平泉」の章を終えている。鐘の音のように余情余韻ののこる文学作品の誕生である。

・「現在」、（大門の跡）→（秀衡跡）田畑と野原→金鶏山→
　高館の跡からの眺め「北上川、衣川、（泉が城跡）
　　（泰衡跡）、（衣が関跡）」
・「昔」、高館の義経主従と義経妻子の籠城戦の悲劇
・「現在」、高館の草むら
・「昔」、唐長安、杜甫「春望」の一首と、日本平泉、芭蕉「夏草や」曾良「卯の花に」の二句
・「現在」、中尊寺の経堂と光堂（草むらとならず残る）

６　芭蕉が目指したこと、我々が目指したいこと

芭蕉は『笈の小文』に、

「そもそも、道の日記といふものは、紀氏（紀貫之）・長明（鴨長明）・阿仏の尼の、文をふるひ情を尽くしてより、余はおもかげ似かよひて、其の糟粕を改る事あたはず。…
〈中略〉…黄奇蘇新のたぐひにあらずバ云事なかれ。」

と、「黄山国・蘇東坡の詩のような、珍しさや新しさがなければわざわざ書く必要がない」と言う。つまり、かつてそこを訪れた「古人」、有名な詩人をたどるだけではなく、「今」だからこそできる新たな気づき発見、新しい美の発見を作品に結晶化すべきだと言う。

まず芭蕉の描いた文学作品としての『おくのほそ道』の旅を読者として充分に味わった後で、今度は「今」「現在」の「平泉」を、「一人の旅人」「一人の作者」として表現してみよう。

その具体例が宮沢賢治である。

賢治は「平泉」の旅で、いくつかの作品を残している。

明治45年〈1912〉５月29日、賢治16歳の盛岡中学４年時の仙台・松島方面修学旅行で、平泉の中尊寺を訪れた体験をもとにした短歌は、

中尊寺
青葉に曇る夕暮れの
そらふるはして青き鐘鳴る

と、盛岡中学の11年先輩である石川啄木の短歌の影響を受けて、三行書で中尊寺の鐘を詠んでいる。さらの芭蕉（桃青）の、「夏草や」の句碑がある毛越寺境内を訪れた体験から詠んだ短歌は、

桃青の
夏草の碑はみな月の
青き反射のなかにねむりき

と、『おくのほそ道』の「壺の碑」で芭蕉が、自然や人は変わっても、文字は残ることに感激して涙ぐんだことを踏まえて、「芭蕉さんあなたの心を結晶化した「夏草や」の句が「壺の碑」のように石碑に刻まれて、あなたの心をここに伝えていますよ」と呼びかけているようだ。賢治の童話『虔十公園林』で杉苗700本を植えて育て新鮮な空気を吐き出す杉林を創った虔十を忘れぬように「虔十公園林」という橄欖岩の石碑を立てたように。

『春と修羅』の「原体剣舞連」には次の表現がある。

むかし達谷の悪路王　　まつくらくらの二里の洞

これは『曾良旅日記』の「タツコクが岩ヤへ不行」とある芭蕉が行かなかった、あるいは行きたくても行けなかった「達谷の窟」を描いた詩の一文である。「平泉」の「達谷の窟」に住んだとされる「悪路王」とは、芭蕉が「夷を防ぐと見えたり」と書いた大和朝廷に服従しなかった人々である蝦夷の首領の一人とされ、一説には朝廷軍の坂上田村麻呂と戦い降服した東北の地元の民にとっての英雄・阿弖流為のこととも伝える。賢治は芭蕉と時空を越えて対話するように、芭蕉とは逆の地元の立場から新たな「蝦夷」を描いた詩を、文学作品を生み出している。新たな作者の誕生である。

おわりに

コロナ禍はまだ続いている。だからこそ、児童生徒、学生と共に、我々も「今」を生きる「一人の旅人」、そして「一人の作者」として、芭蕉のように、賢治のように、まず『おくのほそ道』の原文をじっくりと読み込みたい。そして『曾良随行日記』との比較や、ICT を活用したバーチャルな活動を含めた充分な事前学習や準備をして、本物の「今」の「平泉」の現地を自ら訪ね、自ら歩いて行って全身全霊で実感し、「今」を生きる証の新たな美と感動を結晶化してゆきたい。そのために、現地に生活される方々との本気の対話を重ねつつ、実感のある具体的な作品研究と教材研究、教材創りを今後も進めてゆきたい。

【参考文献】

岩手県教育委員会事務局文化課　1979 『岩手県文化財調査報告書　第三十七集　岩手県「歴史の道」調査報告　奥の細道』岩手県教育委員会
穎原退蔵・尾形仂訳注　2003 『新版　おくのほそ道　現代語訳／曾良随行日記付き』角川ソフィア文庫
井本農一，堀信夫　1995 『新編日本古典文学全集70，松尾芭蕉集①全発句』小学館
井本農一，久富哲雄，村松友次，堀切実　1997 『新編日本古典文学全集71，松尾芭蕉集②紀行・日記編、俳文編』小学館
梶原正昭　2000 『新編日本古典文学全集62，義経記』小学館
山本唯一　1986 『芭蕉の詩想』和泉書院
廣田二郎　1987 『芭蕉と古典』明治書院
尾形仂　2001『おくのほそ道評釈』角川書店
堀切実　2003 『『おくのほそ道』解釈事典―諸説一覧』東京堂出版
楠元六男　2009 『おくのほそ道大全』笠間書院
矢島渚男　2017 『新解釈『おくのほそ道』－隠されていた芭蕉のこころ』角川書店
松枝茂夫　1984 『中国名詩選』岩波書店
宮沢賢治　1985 『宮沢賢治全集』ちくま文庫
大和田建樹　1907 『謡曲評釈』博文館
大谷篤蔵　1978 『謡曲二百五十番集，本文・索引』赤尾照文堂
佐成謙太郎　1930『謡曲大観』明治書院

開催報告

令和３年度「第２回平泉学研究会」実施報告

1　日　　時　　令和４年２月５日（土）13：00～16：00
2　会　　場　　岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター　体験学習室・講座室
3　主　　催　　岩手大学、岩手大学平泉文化研究センター、岩手県、岩手県教育委員会、岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター
4　対　　象　　研究者（事前に県内文化財関係担当者、世界遺産シンポジウム参加者、平泉関係研究者、過去３年間の共同研究者等を中心に招待メールを送信）
5　実 施 方 法　　岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンターをハブとしたZoomによりリモートで実施。
6　日程・発表者　　研究報告①　「柳之御所遺跡の考古学的研究」
　県教育委員会（(公財）県文化振興事業団埋蔵文化財センター）北村忠昭
研究報告②　「平泉の彼岸と此岸の造形に係る比較研究」
　奈良大学教授 (国立文化財機構東京文化財研究所名誉研究員）岡田　健
研究報告③　「出土文字資料の集成的研究」
　国立歴史民俗博物館 研究部教授　三上 喜孝
研究報告④　「東・北アジアにおける政治拠点と平泉の比較研究」
　岩手大学平泉文化研究センター教授　劉　海宇
　岩　手県教育委員会事務局生涯学習文化財課　大道篤史
7　参 加 者 数　　60名

令和３年度「第２回平泉学フォーラム」実施報告

1　日　　時　　令和４年２月６日（日）10：30～16：15
2　会　　場　　ホテル武蔵坊 コンベンションホール桜の間（平泉町）
3　主催・共催
　（主　　催）　岩手県、岩手県教育委員会、岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター、岩手大学、岩手大学平泉文化研究センター、「世界遺産平泉」保存活用推進実行委員会
　（共　　催）　平泉町教育委員会、一関市教育委員会、奥州市教育委員会
4　対　　象　　一般
5　実 施 方 法　　新型コロナウイルス感染症拡大により、無観客・web 開催（YouTube の同時配信）
6　日程・報告者　　基調講演　「奥州藤原氏の薬師信仰と赤沢七仏薬師像」
　浅井　和春（青山学院大学名誉教授）
研究報告①　「柳之御所遺跡の考古学的研究」
　県教育委員会（(公財）県文化振興事業団埋蔵文化財センター）北村忠昭
研究報告②　「平泉の彼岸と此岸の造形に係る比較研究」
　奈良大学教授 (国立文化財機構東京文化財研究所名誉研究員）岡田　健
研究報告③　「出土文字資料の集成的研究」
　国立歴史民俗博物館 研究部教授　三上 喜孝
研究報告④　「東・北アジアにおける政治拠点と平泉の比較研究」
　岩手大学平泉文化研究センター 教授　劉　海宇
　岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター　戸根貴之
研究報告⑤　「日本の学校教育における世界遺産の教材化についての研究」
　岩手大学平泉文化研究センター　准教授
　岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター　中村　孝
調査報告①　「観自在王院跡の調査」
　平泉文化遺産センター　鈴木江利子
調査報告②　「骨寺村荘園遺跡の調査」
　一関市教育委員会　菅原孝明
調査報告③　「長者ケ原廃寺跡の調査」
　奥州市教育委員会　中島康佑
調査報告④　「白鳥舘遺跡の調査」
　奥州市教育委員会　及川真紀
7　動画視聴者数　　640名

平泉文化研究年報　第22号

令和４年３月31日

発　行　岩手大学平泉文化研究センター
　　岩手県

編　集　岩手県教育委員会事務局　生涯学習文化財課

印　刷　河北印刷株式会社

No. 22 **March 2022**

HIRAIZUMI BUNKA KENKYU NENPO

Annual Report of the Hiraizumi Studies

Contents

Research themes

Archeological study on Yanaginogosho Iseki
; About excavation result of Yanaginogosho Iseki
KITAMURA Tadaaki

Comparative study of politic bases and Hiraizumi in East and North Asia
; The religious space of Kaifeng, the capital of the Nothern Song Dynasty
LIU Haiyu

; Town planning concept and its influence compared with Oshu Fujiwara clan
OMICHI Atsushi
TONE Takayuki

Research on the world heritage materials of Hiraizumi in school education
; Report of the research activity in 2021
TSUCHIYA Naoto
TANAKA Nariyuki
NAKAMURA Takashi

; The charm of "Hiraizumi" in Basho Matsuo's "Oku no Hosomichi"
TANAKA Nariyuki

Contents of the event

Report of the 2nd meeting for Hiraizumi Studies
Report of the 2nd Forum for Hiraizumi Studies

Iwate University Center for Hiraizumi Studies
3-18-34 Ueda, Morioka City, Iwate Prefecture 020-8550, Japan

Iwate Prefectural Government and Iwate Prefectural Board of Education
10-1 Uchimaru, Morioka City, Iwate Prefecture 020-8570, Japan